

「あなたが私のお説教を聞きたいと言うから
ここまで来ました。が、そろそろ始めてもいいかしら？」

俺は普通の里の人間だ
今日は前々から練っていた計画を実行に移すべく
目の前の閻魔様を人気の無い路地裏まで連れて来た
勿論、説教を聞きたいなんていうのは嘘だ

「里のど真ん中で説教されるのはちよつと、と言うから
人気の無い場所まで来たのです
ここなら構わないでしょう？」



「ええ、ここなら大丈夫でしょう」

「そう、では早速始めましょうか」

目の前の小さな閻魔様はバカ正直に俺に説教を
かまそうとしている
さっきも言ったが俺の目的はそんなくだらない事
じゃない、俺の目的は……

「閻魔様の性奴隷化調教開始だ!!」

「はっ…!?!」

俺の目的は目の前のお堅い閻魔を俺好みの肉便器に作り変えてやる事だだが普通の方法ではこの堅物を箆絡するなど不可能だろう

そこでこの催眠術だ
無縁塚で偶然拾った『誰でも出来る!催眠術!』
この本で学んだ催眠術を使い
この女の常識を作り変えてやるのだ



「お前はチンポ大好きな肉便器だ…
お前は男がハメたいと言ったら進んでその肉穴を
差し出さねばならない、そうだな?」

「…はっ」

「当然肉便器には服など不要だよな」

「そう…ですね」

「そうですよね…何で私服を着ているのかしら？
これじゃおチンポのお世話もできないじゃない
教えてくれてありがとう」

早速『新しい常識』にのっつて服を脱ぐ彼女
たちまち俺が長年夢見ていた彼女の裸が露になる
くびれも少なく膨らみに乏しい貧相な身体だ
だが、凜とした制服姿の下にこんな未熟な肉体が
隠れていたかと思うと股間の膨らみが痛いほどに
張り詰めた



「あら、大きい♪こんなに大きく膨らませて
窮屈だったでしょう？私に任せて♪」

「おっと嬉しい申し出だが、まずはその身体に
俺のザー汁の匂いを染み付かせて誰の雌穴か
分かるようにしっかりとマーキングしとかないとな」

「なるほど♪分かりました」

閻魔…映姫に見つめられながら肉棒を抜く…
そんな現実離れした光景にたちまち限界が訪れた

—ぶびゅっ!!ぶびゆるるるっどびゅっ!!—

濃厚な種汁がチンポの先から迸り
映姫の白い肌に着地する
肉棒が跳ねる度白い迸りが彼女の身に化粧を施す

「ひゃんっ♪きたあっ♪くっさいザー汁
すっごい濃厚♪」



本来なら嫌悪されて然るべき汚濁を嬉々として
全身で受け止める映姫
催眠術は完全に成功したらしい

「んー♪私の体に沢山雄汁ぶっかけ
ありがとうございます♪」

「こんなに射精してもらえるなんて肉便器冥利に
尽きますね♪ああ、濃厚な雄の匂いで
鼻が曲がりそうです♪どれだけ溜め込んでいたんですか」

「勿論この日の為にガッツリオナ禁をしてきた
全てはこのちっばい閻魔をドロドロにブチ犯す為だ」

「これで映姫の肉穴は全部俺のモノだね♪」

「はい♪あ、でもおまんこは駄目ですよ」



「…え？映姫は肉便器なんだから…」

「絶対駄目です」

「どうやら俺の催眠術では干渉できない強固な暗示が
施されているらしい
閻魔という役職に関係あるのだろうか
仕方ない、前の穴は諦めよう…」

「それじゃあちゃんと使用方法を書いておかないとね」

「…」

「わあ、素敵♪」

「これなら映姫の穴の使い方バッチリだろう？」

「そうですね♪これでどこに出しても恥ずかしくない立派な肉便器になる事が出来ました♪」

体中にビッシリと書き込まれた卑猥な落書きの数々その一つ一つを映姫は愛しげに指でなぞる



「これで肉便器契約は完了だね♪」

「これからは四季映姫・ヤマザナドゥじゃなくて四季便姫・シリアナドゥとしてしっかり俺のチンポのお世話に励むんだよ♪」

「はい！任せてください♪」

「予想外の出来事はあったが無事映姫を俺の肉便器にする事が出来た。これからの調教の日々を想像するだけで股間が熱く滾る…」

「んちゅ…れる…どうですか？
お掃除フェエラ、ちゃんと出来てるかしら？」

「ああ…いいよ映姫…
映姫のお口は最高のおちんぽ掃除機だね♪」

あの日から映姫は俺の肉便器となった
俺の合図で公明正大で皆の模範となるべき閻魔は
淫乱卑猥なおちんぽ奉仕肉と化す
今だって俺のおちんぽ美味しそうにしゃぶっている
最高の眺めだった

「んー♪こんなに一杯チンカスつけて…
いけないおちんぽですな♪」

「映姫の為にちんぽ洗わないでいたからね」

「うふっ♪嬉しい、ちゃんと私のお仕事残しておいて
くれるなんて♪」



「お礼に口の中全部使っておちんぽ扱いてあげる♪」

「うおおっ……！ちっぱい閻魔にちんぽ食われる……！」

「一々舌先でチンカスを舐めとるのが
まどろっこしいのか、俺の肉棒を丸々頬張ろうとする映姫
熱くて粘りのある唾液で満たされた口内はまるで
生殖器のようにねっとりちんぽに纏わりつく」

（んふっ♪これすっごおい……♪
舌先でこそぐだけでも頭が痺れる雄臭だったのに
一気に頬張ったら口の中一杯に広がって……♪
こんな素敵な匂いをめいっぱい嗅げるなんて
これぞ雌肉便器の醍醐味ですね♪）



ねっとりちんぽをしゃぶられるのもいいが
そろそろ強い刺激が欲しくなってきた

「そろそろ緩い刺激にも慣れてきたから激しく
してくれないかな」

「んっ…分かりました

もう少しくっさいちんぽ臭を味わいたかったですけど
肉便器は雄の快楽を

最優先させなければいけませんからね♪」

素直に映姫は俺のちんぽを口に含み顔を激しく

グラインドさせる

同時に舌も激しく這わせ俺のちんぽに強烈な刺激を
与えてくる

「んっ♪んぶっ♪ろうでふか？
わらひの本気フェラはっ♪」

「うおっ…いいぞ映姫っ！そのまま続ける…っ♪
そろそろ」褒美やるからなっ!!」



「おおっ!!出るっ!!淫乱ザー汁処理便器の口まんこに
ザーメン出るっ!!」

映姫の激しい口淫に堪らず射精してしまう
もう少し彼女の口の中を堪能していたかったがまあいい
怒張が跳ねる度鈴口から白い汚濁が飛び出し
彼女の口内を白く染め上げていった

「あー…映姫の口まんこ最高♪
あ、おいおい口から零すなよ?
お前は精液を受け止めろしか能の無い
肉便器なんだからな?」

映姫の口の中ではいまだに精液が吐き出され続けている
彼女の小さな口に収まりきらずに溢れている
それでも一生懸命精液処理便器としての
役目を果たそうとしている姿に愛しさをおぼえる



「おおー……我ながら沢山出したな……
自分でも引いちやうくらい出たわー……」

ようやく射精も終わり、映姫の口からペニスを引き抜く
ザーメンを飲み干すまでが回まんこでの御奉仕だが
あえて飲み込ませず口を開けさせ中の様子を見る
こつてりとした白濁の海の中を赤い軟体生物のように
彼女の舌がのたうっている
その様子だけでもう一回戦いけそうだった

「まだ飲んじや駄目だよー
しつかり精液の匂いを染み込ませて俺の匂いを
記憶しないとね♪」

「ふあい……♪」
（ふあ……♪ 凄い……私のお口、本当に精液排泄する為だけの
穴になっちゃった……♪……うやあって口の中に
ザー汁溜めると鼻から雄の匂いが突き抜けて
お腹の下がきゅんきゅんしてきちやう……♪）



「はい、飲んでいいよ」

「ふあい♪」

映姫の美囊に俺のザー臭をたっぷり染み込ませた後
彼女に精飲許可を出す
待ちわびたように、そして大好物を味わうように
ゆっくりと口の中の子種を嚥下していく

「あっ♪おちんちんにもついてますね♪
しっかりこっちも綺麗にしないと……」

ペニスにこびりついた精液もしっかり舌で拭う映姫

「はい、終わりました♪
プリップリのザーメンご馳走様でした♪」

「良く出来たね映姫、ロマンコ使い心地良かったよ」

「うふふ♪満足してもらえて何よりだわ♪」

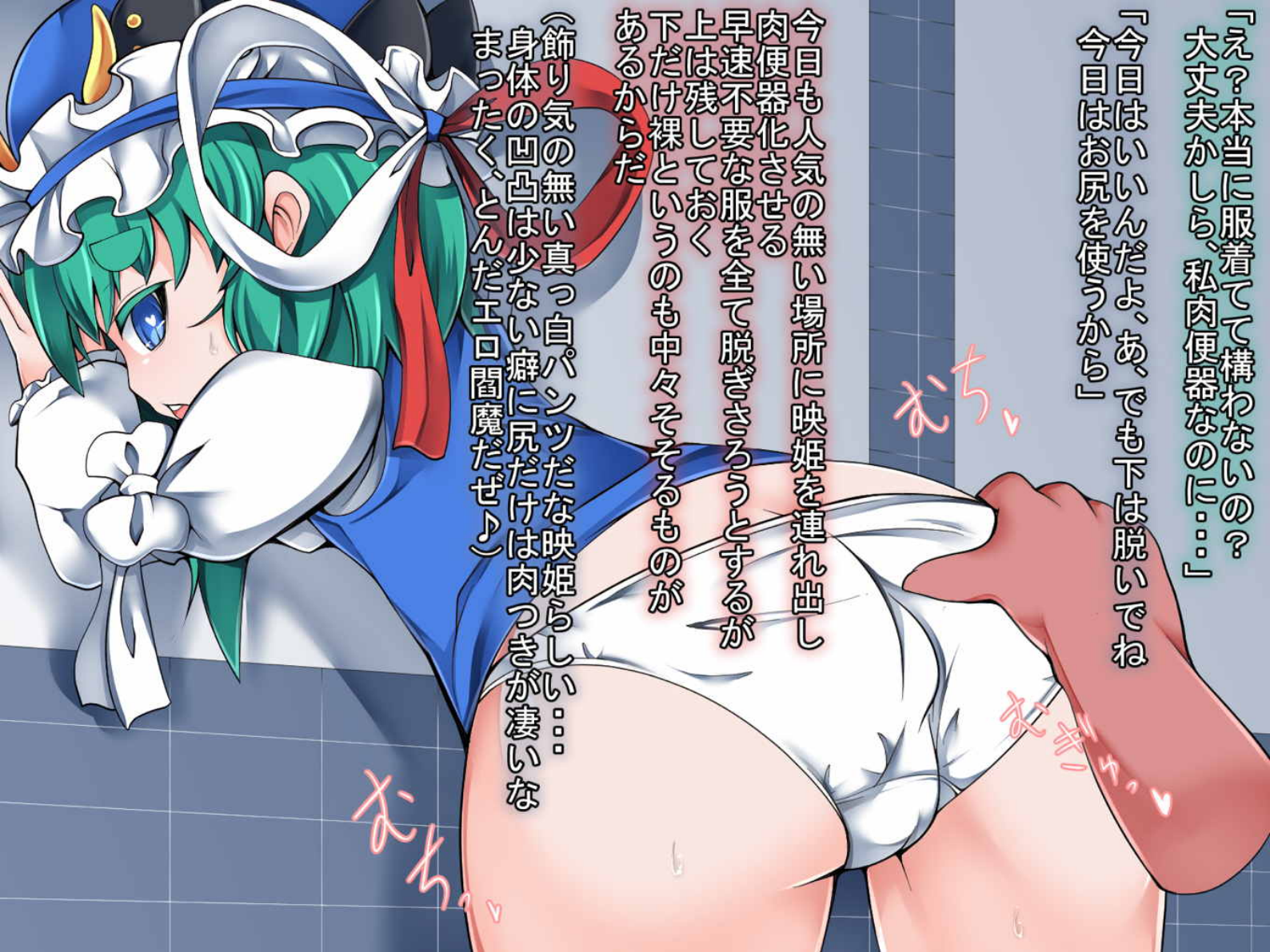
自分が肉便器である事を信じて疑わない彼女
まったくもって催眠術様様だ
さて、次はどんなエロい事を試そうか……
夢も股間も膨らみっぱなしだ……

「え？本当に服着てて構わないの？大丈夫かしら、私肉便器なのに……」

「今日はいいいんだよ、あ、でも下は脱いでね今日はお尻を使うから」

今日も人気の無い場所に映姫を連れ出し肉便器化させる早速不要な服を全て脱ぎさろうとするが上は残しておく下だけ裸というのも中々そそるものがあるからだ

(飾り気の無い真っ白パンツだな映姫らしい……身体の凹凸は少ない癖に尻だけは肉つきが凄いなまったく、とんだエロ閻魔だぜ！)



「パンツも脱ごうね！：あ、パンツは貰ってくね
おお♪すっげえぶっくりアナル♪えっるい♪」

下着も取り払い映姫の下半身が完全に露になる
下の毛も生えてない淫裂にぶっくりと膨らんだ

不浄の穴が丸見えだ
これから行われる行為に期待しているのか

時々ひくついている
期待に答え肛門を指で穿ると

濡れアナルというやつだろうか
次第に又ルついてきた

「すっげ：映姫の尻穴もう完全に生殖器じゃん♪
おまんこみたいに濡れてきてるよ」

「：もしかして一人で尻の穴弄ったりしてた？」

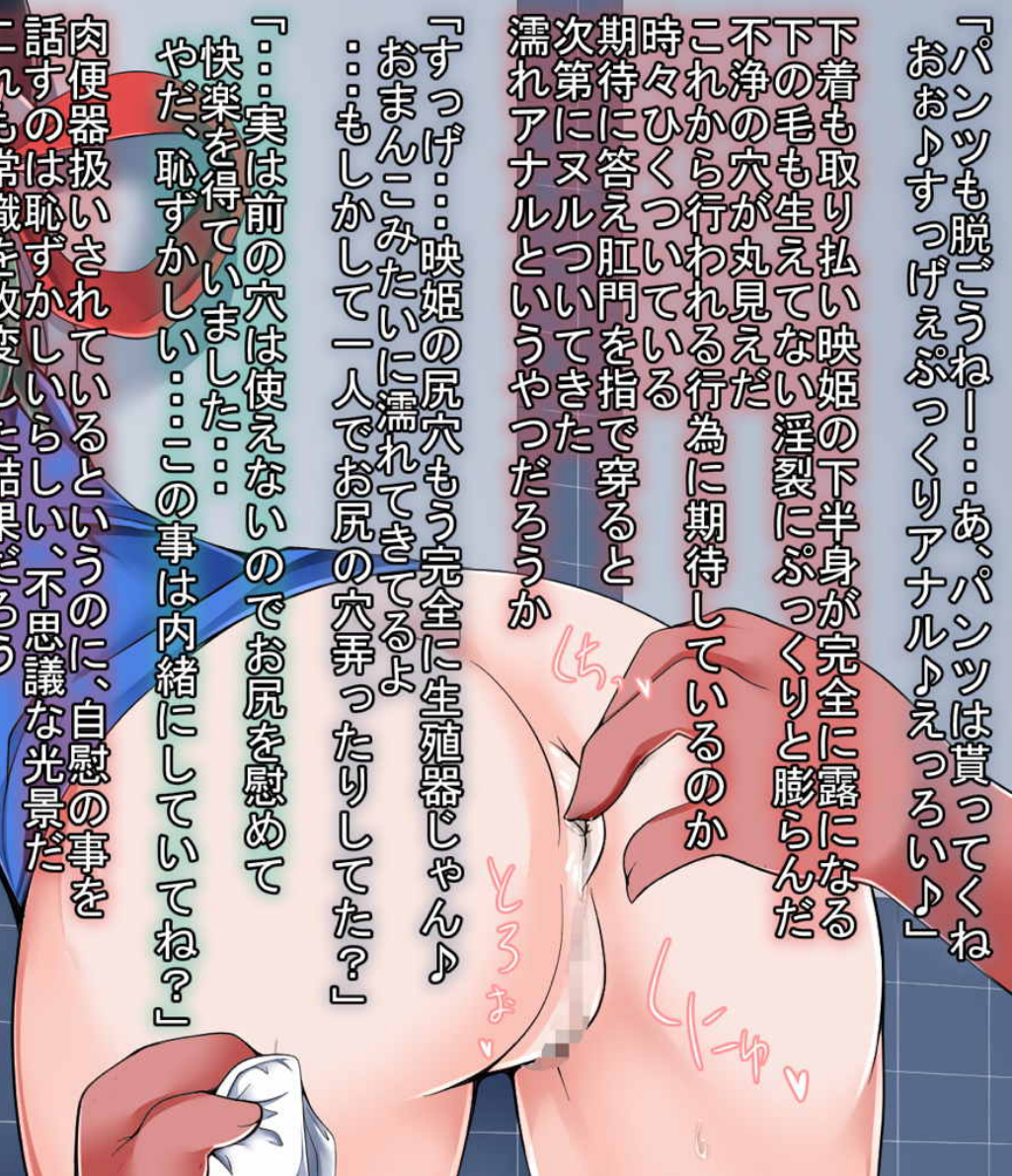
「：実は前の穴は使えないので尻を慰めて
快楽を得ていました：」

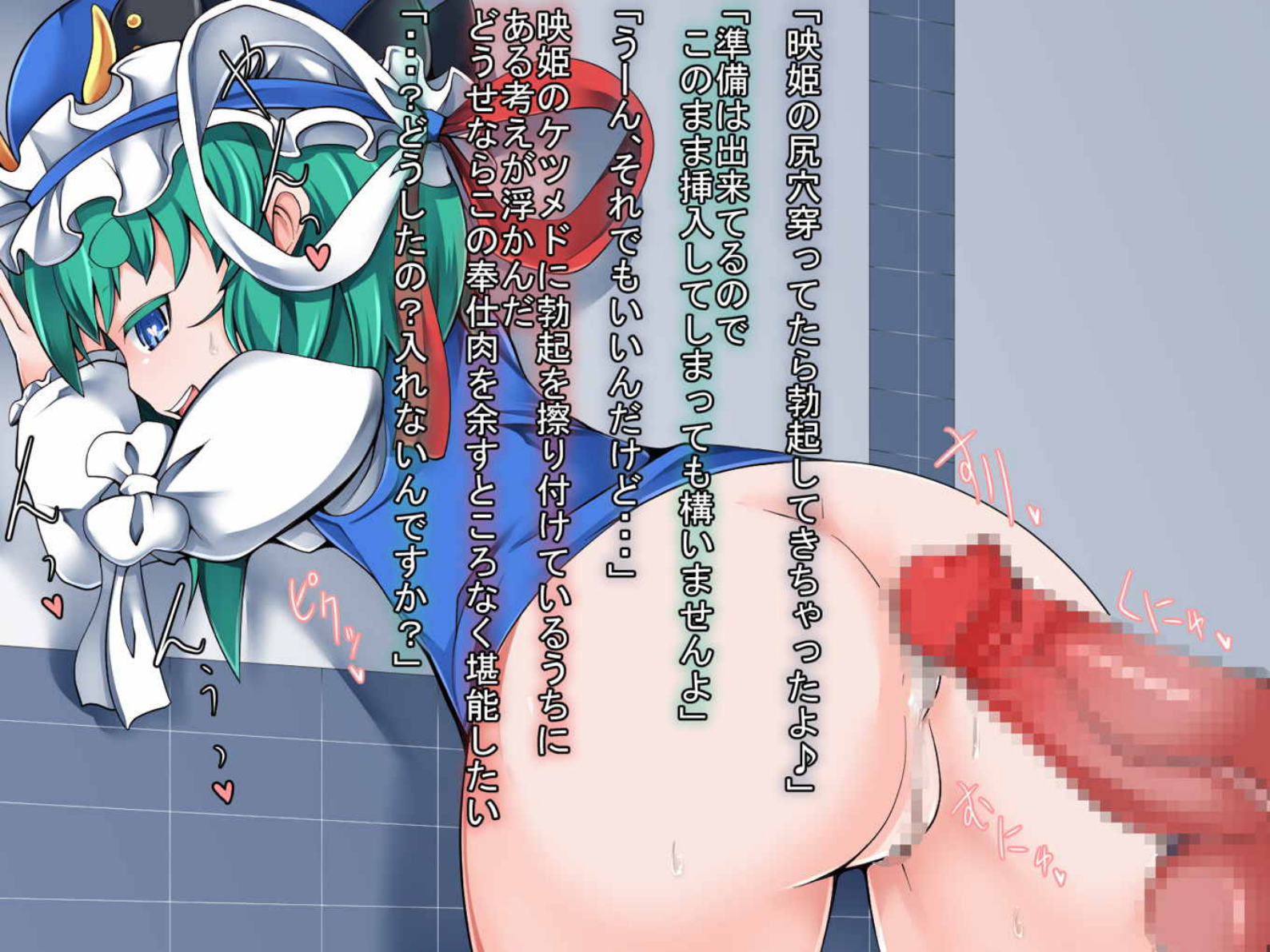
「やだ、恥ずかしい：」の事は内緒にしていってね？」

肉便器扱いされているというのに、自慰の事を
話すのは恥ずかしいらしい、不思議な光景だ

これも常識を改変した結果だろう

「私の自慢のちんズリ穴です♪あなたのおちんぽを
しっかり扱きあげてみせるわ♪」





「映姫の尻穴穿ってたら勃起してきちゃったよ♪」

「準備は出来てるので

このまま挿入してしまっても構いませんよ」

「うーん、それでもいいんだけど……」

映姫のケツメドに勃起を擦り付けているうちに

ある考えが浮かんだ
どうせならこの奉仕肉を余すところなく堪能したい

「……?どうしたの?入れないんですか?」

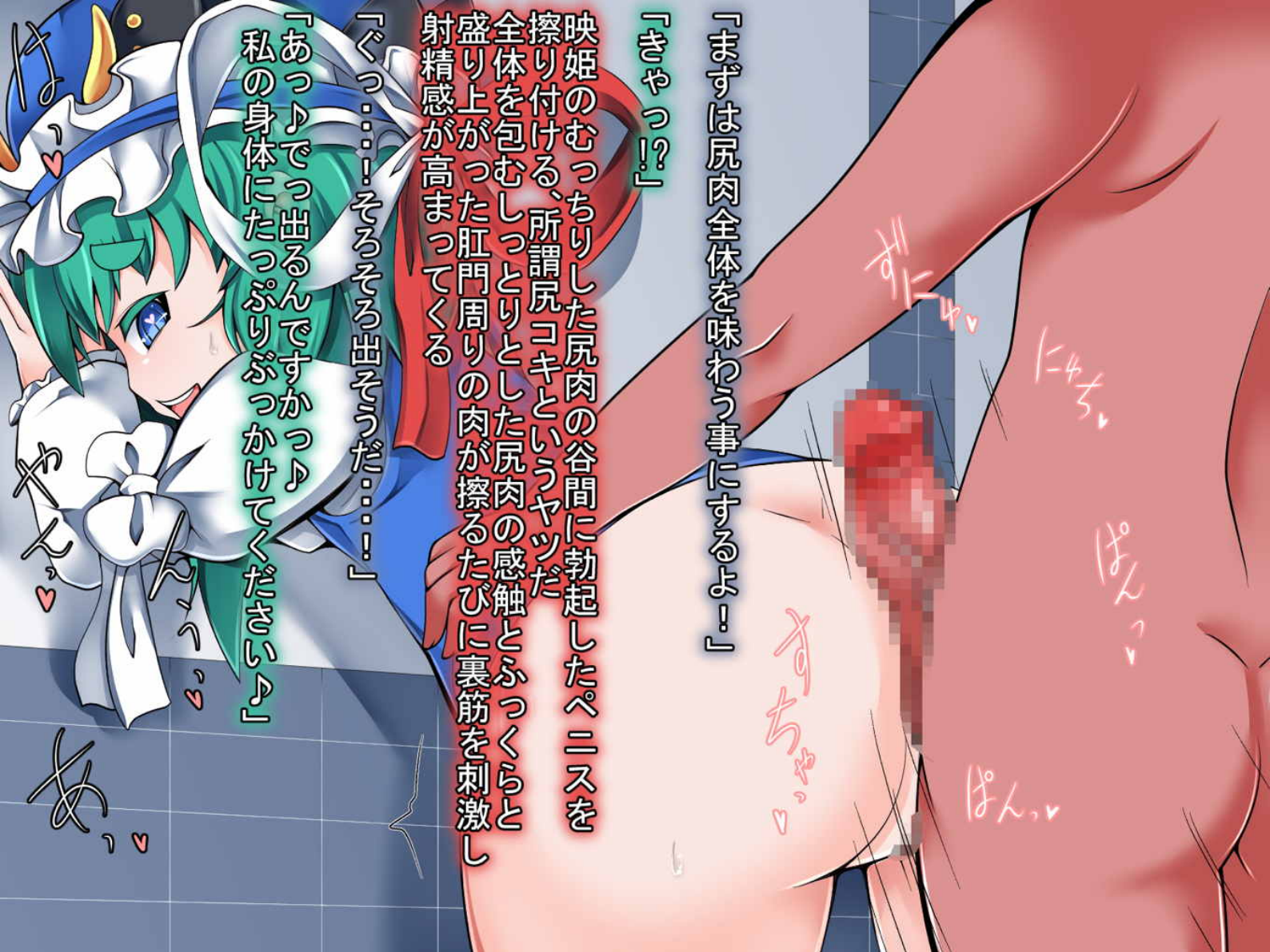
ぴんぽん

んんんん

あゝ

くーん

んんん



「まずは尻肉全体を味わう事にするよ！」

「きゃっ!？」

映姫のむっちりした尻肉の谷間に勃起したペニスを擦り付ける、所謂尻コキというヤツだ
全体を包むしっとりとした尻肉の感触とふっくらと盛り上がった肛門周りの肉が擦るたびに裏筋を刺激し射精感が高まってくる

「ぐっ……！そろそろ出そうだ……！」

「あっ♪でっ出るんですかっ♪
私の身体にたっぷりぶっかけてください♪」

あ、♡

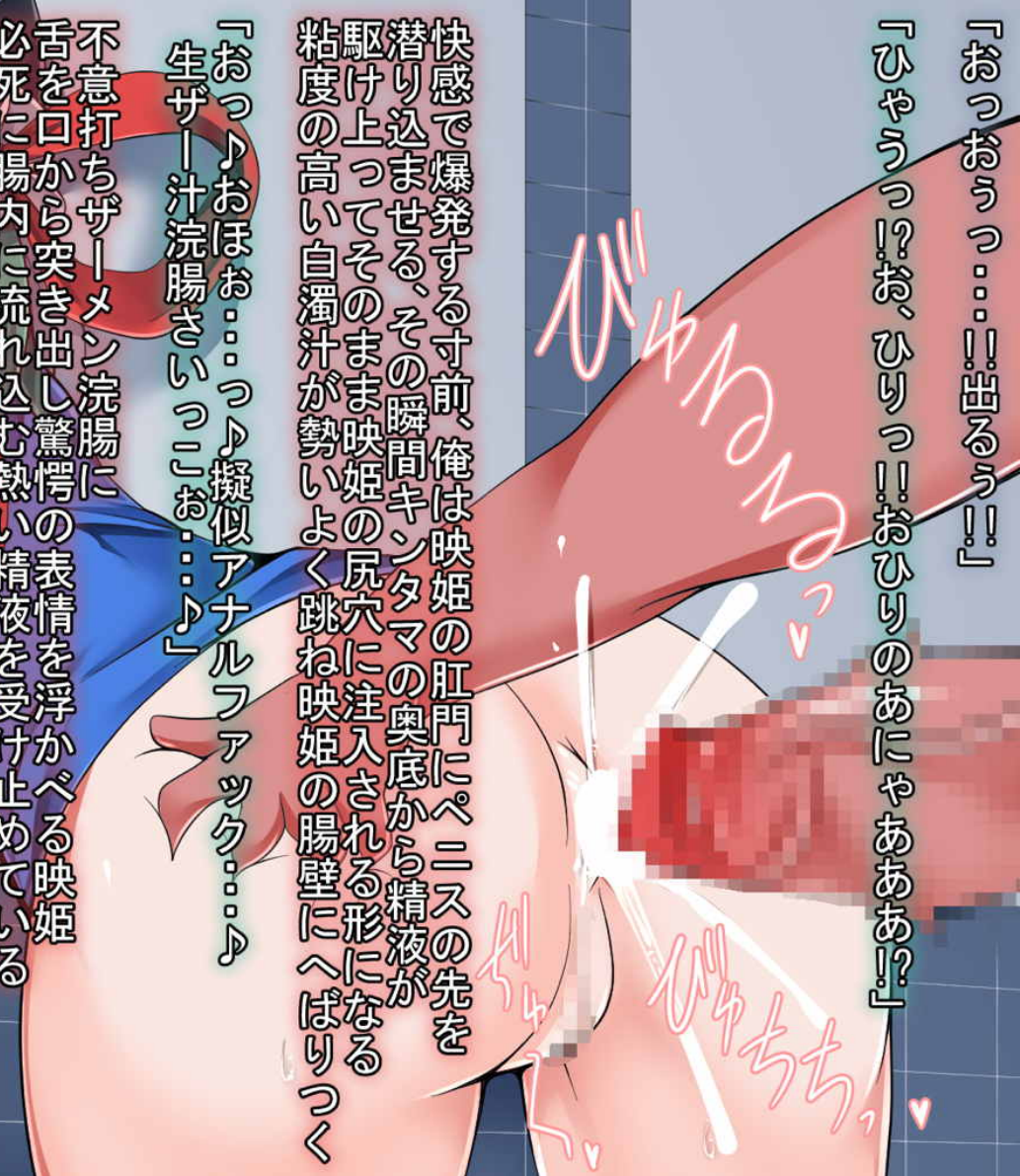
「おっおっおっ……!!出るう!!」

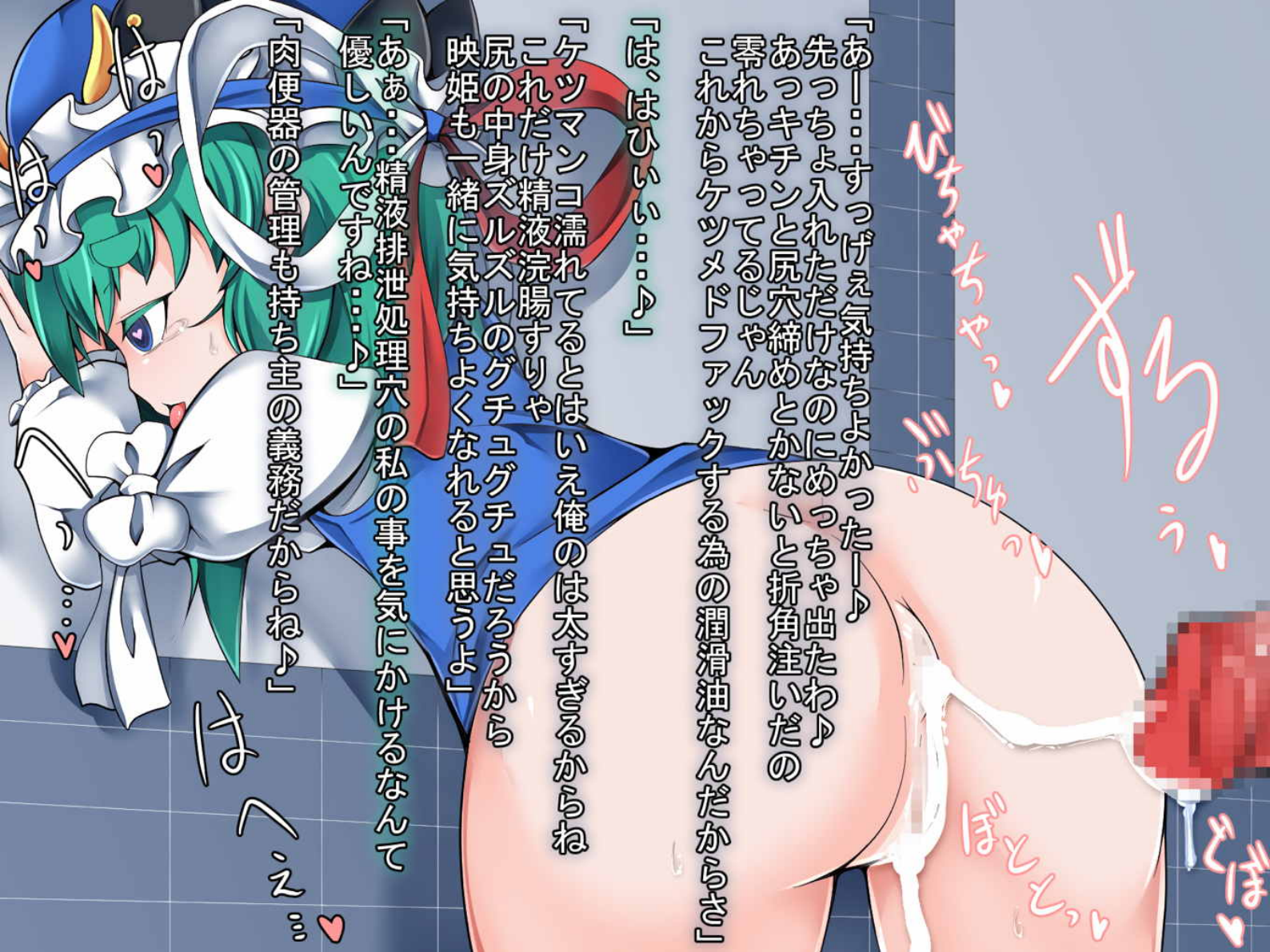
「ひゃうっ!?お、ひりっ!!おひりのあにゃあああ!」

快感で爆発する寸前、俺は映姫の肛門にペニスの先を
潜り込ませる、その瞬間キンタマの奥底から精液が
駆け上ってそのまま映姫の尻穴に注入される形になる
粘度の高い白濁汁が勢いよく跳ね映姫の腸壁にへばりつく

「おっ♪おほお……っ♪擬似アナルファック……♪
生ザー汁浣腸さいっ」お……♪」

不意打ちザーメン浣腸に
舌を口から突き出し驚愕の表情を浮かべる映姫
必死に腸内に流れ込む熱い精液を受け止めている
精液排泄器穴の鑑だ





「あー……すっげえ気持ちよかったー♪
 先っちよ入れただけなのにめっちゃ出たわ♪
 あっキチンと尻穴締めとかないと折角注いだの
 零れちゃってるじゃん
 これからケツメドファックする為の潤滑油なんだからさ」
 「は、はひひい……♪」

「ケツマンコ濡れてるとはいえ俺のは太すぎるからね
 これだけ精液浣腸すりや
 尻の全身ズルズルのグチュグチュだろうから
 映姫も一緒に気持ちよくなれると思うよ」

「ああ……精液排せ処理穴の私の事を気にかけるなんて
 優しいんですね……♪」

「肉便器の管理も持ち主の義務だからね♪」

はへえ……♡

ぐちゃぐちゃっ♡
 ぷちゅっ♡
 ぽとぽとっ♡
 ぐぼっ♡

「あ……いよいよ私のお尻の穴を使うんですね♪
いつでも準備オーケーです♪」

「そうだよ、これから映姫の糞穴で俺のチンポを
ゴシゴシ扱いてたっぷり生ケツ交尾決めるからね♪」



あ……♡

映姫の手をハンドル代わりに掴み後背位の体勢をとる
あらためて彼女の尻を眺めるがやはりでかい
これなら俺のデカマラも根元まで

飲み込んでくれるかもしれない
まあ、入らなくても無理矢理ねじ込むわけだが……

先程尻コキで射精したにもかかわらず硬さを保った
怒張を映姫のヒクつく肛門にあてがう

「おっ……♪おおおっ……♪ききました♪極太ちゃんぽ♪
メリメリって私の尻穴押し広げられてるう……♪
すっごいエラ……こんなエグイかえしが今から
私のお腹の中で滅茶苦茶に暴れちゃうのね♪」

「うおっ……きつつい……先つちよ入れただけなのに
すっげえギテギテに締め付けてくる……っ！」



おっ……♡

ふにふにとした肛門周りの肉とは対照的に
映姫の尻の中はみっしりと肉が詰まった
キツイ肉の管だった
だがさっき腸内に注入した精液と分泌された腸液の
カクテルが俺のペニスに潜り込む為の手助けになっている
ゆっくり慌てずに腸内の秘肉を掻き分けていく

「くおお。。。ぜ、全部入ったよ。。。！
映姫のケツマンコ、俺専用のペニスケースになったよ♪」

「ひはああ。。。♪きたあ♪おチンポ様、私のチンポ奉仕穴に
奥まで入ってるう♪
やっとなチンポお迎えできたあ♪」

「そんなに待ち遠しかったんだ？」



あ。。。ははっ♡

「当たり前です！私はちんぽを喜ばすために
生まれてきた精液排泄肉便器なんですから
おチンポ様を喜ばせる事ができなければ
生まれてきた意味がないじゃない♪」

「じゃあこれで映姫も立派な肉便器だね
お祝いにたっぷり精液どっぴゅんしてあげるよ♪」

暫くすると映姫の尻穴も緊張が解れ
時折物欲しげに肉竿をふわりと締め付けてくる
ケツマンコがチンポからの刺激を欲しているのだ
俺は望み通り種付けピストンを開始してやる

「おっ♪おぐっ!!んほおっ♪すっすごっ♪
チンポっ♪チンポが私のケツ穴ジュコジュコって
行ったり来たりしてるうっ♪」

激しくペニスを映姫の腸媚粘膜に擦りつけてやる
彼女の都合などお構い無しの独りよがりのピストン
彼女の腸管は俺の生肉オナホと化していた



「うひいっ♪んあんっ♪わ、私のっ♪
私の糞穴どうですかっ♪きもちいですかあっ♪」

「ああっ……!たまんねえ……っ!とろっとの腸壁が
ねっとりチンポに絡み付いてきやがる……!
本当にこれ尻穴かっ!?マジモンのマンコみたいだ……!!
ったくとんだエロ便器だっ!
くっ……ヤベエ……もっ出そうだ……!
エロ閻魔の排泄穴で種付け汁コキ出ちまう……!」

「おあつ!!おつ...ほぎいつ...♪
へっ...へひい...♪で、でてりゅ...♪
こつてり特濃孕ませ汁う♪ごびゅごびゅって
えつぐい音鳴らせてわらひの尻穴に充填されてりゅ♪
孕ませる気満々のイケイケ精子♪わらひの卵に受精っ
しようどビチビチ跳ね回ってるう♪ごめんなひやいっ
でもあなた達は受精できにやいの♪
だつてそこっ♪繁殖する為の穴じゃにやいもによっ♪
排泄穴だもんっ♪」



「うおおおつ...止まらねえ...!!
そこら辺のまんこよりもよっほど名器だぜ♪
排泄器官なのに生殖器以上の気持ちよさとか
お前は最高の精液排泄穴だぜ♪」

ようやく射精が収まり映姫の尻穴からペニスを取り出す
相変わず硬いまま、肛門を抉じ開けながら苦しそうに
勃起チンポがその姿をあらわした
竿全体が腸液と自濁液が塗されててらてらと光っている
巨大な肉の杭を引き抜かれた肛門は激しい行為のせい
ぽっかりと口を開けたままになってる
そこから間抜けな空気音とともに中出ししたばかりの
子種汁がごぼごぼと零れ落ちる



「うは、凄いや映姫、映姫の尻穴まだ俺のチンポ欲しそうに
口をパクパクさせてるよ♪俺の出した精液が涎みたいだ
まったたく、卑しい精液処理穴だね」

「だってえしようがないじゃないですかあ♪
それがおチンポ奉仕穴の大事なお仕事なんだからあ♪
でもこれで精液処理穴におチンポ認証完了です♪
これから好きな時にガンガン使って
あなたのチンポの形状を私のケツマンコに教え込んで
あげてくださいね♪」

「えーと……これでいいんですか？」

「そうそう、これで映姫のおチンポ受け入れ穴が丸見えになったね」

「見るよりも実際に使った方が気持ちいいと思うけど？」

「まあまあ慌てないで、道具も定期的に点検しないと長持ちしないからね、映姫みたいな優秀な肉便器は大切にしないと♪」

「お気遣いありがとう♪」「ございます♪」

平時の彼女なら絶対しないであろう姿勢をとらせ
あまつさえ性処理道具扱いされてるにも関わらず
感謝の言葉を返す映姫
催眠術によって自分がこういう行動を取るのを
疑問にさえ思わない



「というわけでケツメド点検タイム♪」

「あんっ♪ゆ、指い♪お尻の穴ホジホジしてるっ♪」

点検と称して映姫の肛門に指を挿入してみる
僅かな抵抗の後指先がめり込んだ
肛門とは思えない柔らかさだ、しかしそれでいて
いざ肉棒を突き込むと強烈な締め付けでもって
出迎えをしてくれるのだから堪らない
マンコよりもよほど生殖器じみている

おまっ♡

おまっ♡

おまっ♡

おまっ♡

おまっ♡

おまっ♡

おまっ♡

おまっ♡

おまっ♡

「ど、どうですかっ？私のケツマンコっおっ♪
異常はないですかっ？んあっ♪」

「んー、今のところろはないかな、しっかりおマンコしてるし
もう少し詳しく調べてみようか」

「よい……しよつと……！」

「んごっ……おっ……おおおっ……!?
おおっ……♪おひりっ♪腕入っちやああっあおっ♪」

指を窄ませそのまま腕を前へと進ませる
肛門を押し広げて尻穴の奥へ拳が埋まっ
腕をチンポと勘違いしたのか即座に排泄器官から
生殖器官へスイツチした映姫のケツマンコは
じゅぶじゅぶと粘液を吐き出し挿入をスムーズにさせる
づいーに一番太い部分を飲み込むとそのまま一気に
ずるんと腕を腸内に飲み込んだ



「ひぎっ!? あがっ……♪おうっ♪おっおっ♪
すごお……♪「んなぶつ」といの入っちやったあ……♪」

「映姫の性処理穴すごい包容力だよ♪
入り口はキツキツだけど腸壁がふんわり手のひらを
包み込むエロエロニ重構造だね♪」

そのまま尻穴に深く埋没した腕を思い切り引き抜く
下品な空音と共にぬるんと腕が指先まで姿を現した
そして間髪入れず再び腕を思い切りねじ込むと
腸液が肛門と腕の隙間からぶじゅぶじゅと溢れ出した
それを交互に繰り返して映姫の腸粘膜を擦りつける

「おおっおっ♪おーっ♪んおあっ♪
うっ腕えっ♪腕がわらひのケチュマンコ
ぶっちゅぶっちゅ掻き回してりゅのほおっ♪」

「うわっ…すっげーエロ粘膜♪こんなぶっといのも
出し入れ自由とかどんだけ食いしん坊なんだよ
この変態閻魔がよおっ!!」

「ごめんなひやいっ♪何でも飲み込んでんじやう
エロケツマンコでごめんなひやいっ♪」



次第に腸内の蠕動が激しくなり映姫の身体全体が
痙攣し始めた事から限界が近いことが伺えた
絶頂の限界を見計らってギリギリまで腸壁を掻き上げる
そしてギリギリまで性感を高めてやり一気に腕を
肘の辺りまで押し込んだ

「うあつッッッも……らめえ……ッ
い、いぐっッいぐいぐいぐうッエ回ケツマンヨ壁
じゅこられてイツぢやうッ」
「イグウウウウウウウウウウウッッッ」



ガクガクと激しく痙攣し尻穴とまんこから勢いよく
粘液をぶしゃぶしゃと噴出しケツアクメを迎える映姫
俺の腕を啜え込んだケツマンヨは
腕を食い干切らばかりにぎちぎちと締め付けてくる

「……気持ちよかった？」

「……は、はひい……♪」
「ごめんなひやい……♪
ただのチンポ奉仕穴の点検だったのに
勝手に気持ちよくなっちゃってごめんなひやい
ケツアクメキメちやってごめんなひやい……♪」

お
お
お……

は
は
は

は
は
は

は
は
は

「いいんだよ、それだけ感度がいいってことは
映姫は優秀な肉便器ってことなんだから
……ところで映姫が尻穴快樂でただの痙攣するエロ肉に
なってるの見てたら俺もチンポ起ってきちゃったよ
雌尻肉穴も下準備オツケーだしこのまま
精液映姫の糞穴に廃棄しちやおっかな♪」



「さあ、点検も済んだ」とだし本番のケツハメセックス

したくありませんか？
そのままチンポ勃起させたまま人里を歩いたら

変態扱いされてしまいますよ？

そうならない為にもコンディション完璧な私の
ザー汁処理便器穴にザー汁コキ捨てちゃうべきです♪」

さっきのアナルフィストですっかり発情しきった映姫が
足をおっ広げていやらしく腰をくねらせ俺を誘惑する
ほこほこと湯気をたてた二つの肉穴が涎を垂らして
勃起ペニスを待ち構えている



「まったく…便器の分際でおチンポ催促するとか
生意気だな♪そんな悪い便器には俺のフル勃起した
種付け棒でお仕置きしてやるよ♪」

ドキ

は

っ

ドキ

しわ

わわ

しろぎ

「はひいいい……♪きたあ……♪
お仕置き棒私の性欲処理穴にきたあ♪お、あ……あ♪
な、中のお肉、無理矢理押し広げて入ってきてりゆ……♪」

さつきチンポよりも太い腕を押し込まれ、限界を超えて
伸びきっていた肛門は緩むことなく新たな訪問者に
強烈な刺激を与えてくる
入れる物の太さに自由に穴の大きさをフィットさせてる
ようだった、素晴らしい柔軟性だと言わざるを得ない

「マジかよ……すげえな、あんな乱暴にしたのに
締め付け変わらねえ♪
どんだけ食欲旺盛なんだよこのケツマンコはよお♪」



「んへえ……♪」めんなひやい♪出す穴なのに
飲み込むのだいしゆきで「めんなはいっ♪
そのおチンポでわらひの排泄器官ごしゆ「しゆ
清掃してくらひやいっ♪」

「ほおっ♪おおっ♪しゅごいっ♪
いきなり本気のガチハメピストンッ♪
わたひの腸粘膜っ♪じゅこじゅこチンポで
けじゅられてりゅっ♪」

挿入から間を置かず高速ピストンを開始する
二人の太股がぶつかり合う乾いた音と粘液を掻き回す
水音が鳴り響く、凶悪に反り返ったエラが腸壁をこそぐ度
映姫の身体が快感に跳ね新しい潤滑油を粘膜から分泌する

「くうっ……相変わらずの名器だぜ……♪
そろそろ出るぞっ……！特濃ザーメン映姫のケツマンコに
たっぷりひり出してやるっ！」

「いっいつでもどうぞっおっおっ♪
おっ♪わらひのザーメン廃棄穴いっつでも射精受け入れ
準備オツケーれしゅっ♪」

ペニスに精液が駆け上がってくる感覚が強くなってくる
いっつもならそのまま中出しをキメるところだが
今回は少し趣向を凝らそうと思う



「戻れ、【四季映姫・ヤマザナドゥ】」

「……えっ?」

射精する前に映姫にかけた催眠を解いてやる

「えっ……私は一体……いつ!? え? 何これ
いやあああ!? 何してるのあなたは!? なんで私こんな
格好で……!」

催眠術が解けた映姫は自分の置かれている現状に
酷く困惑している様子だった

「は、早く私から離れなさい!!」「こんなこととして
ただで済むと思ってるの!」

「何言ってるの? 映姫こそここまでやっていて
ただで済むと思ってるわけ?
たっぷり出来立てアツアツゲームン映姫の
便器ケツマンコにぶちまけてあげるから♪」



「おらあつ!!その卑しい糞穴で俺の種付け汁
たっぷり飲み干しやがれええつ!!」

「いやああああああああああああつ!」

俺の射精と映姫の悲鳴が重なる
音さえ聞こえてきそうな激しい射精だ
ポンプのようにダクダクと映姫の腸内に本来の役目を
果たせない哀れな精子がブチ撒かれる

「イヤって言う割には映姫のケツ穴、俺のチンポ啜えて
離さないよ?本当はケツマンコされて
喜んでるんじゃないの?キンタマの中身空になるまで
俺の種汁注ぎ込んであげるからね♪」



数分間は射精が続いただろうか
本当にキンタマの中身が丸ごと搾り出されるかのような
快感を十分に堪能した
やがて硬さを失ったペニス
は映姫の肛門の締めりに
押し出され大量に吐き出した
精液と共にずるりと
抜け落ちる

急に正気に戻された映姫は息も絶え絶えに
しかし、俺に対する明確な敵意を視線に乗せて
睨みつけていた

「あなたは絶対に許しません……!!」

「じゃーん♪これなーんだ？」

「そ、それは……!!」

「これは映姫ちゃんのだスケベな姿を映した写真です♪
これをばら撒かれたくなかったら……ね？」

「げ、外道……!!」



いつものように人気の無い場所へ映姫を呼び出す
しかし、いつもと違う点が二つあった
一つは映姫が正気なこと、調教中の写真を脅しの材料に
使ったら正気の状態でもいう事を聞かせることが出来た
まあ、本人は反抗の意思を隠そうともしていないが
もう一つは便器の利用者が増えたという事だ
知り合いに参加者を募りこの場に同席してもらった

「ほら、どうしたの？さっき言ったとおりにしてよ
出ないと……」

「わ、分かりました……」

俺が言うつと映姫はおずおずと座り込み足をがに股に
広げポーズをとる、エロ蹲踞というやつだ

「うお、すげえエロイポーズ
閻魔様マジでお前の言いなりかよ」

「まあな、なんてったって映姫ちゃんは
俺の肉便器だからな♪」

「くっ……」

かばあ……

もじ……



「それじゃあ今度は服を脱いでもらおうかなー」

「……」

「嫌なら俺は別にいいんだけど？」

「……脱げばいいんでしよう！脱げば……！」

半ば自棄になって服を脱ぐ映姫、脱ぎ方にもう少し色気が欲しかったが仕方ない制服を脱ぎ終えた映姫はなんとも卑猥な下着を身に付けていた、乳首は丸見え、陰部も申し訳程度に隠れていて、雄の劣情を煽るデザインになっているもちろん、俺が着てくるように命令した

「うんうん、ちゃんと着てきたんだね偉いね♪」

「うひょー♪お堅い制服の下にこんなドエロイ下着着けるとか本物のビッチかよ♪」

「あれ？しかもなんかパンツ濡れて透けてね？」

「……違っ!?」それはその……」



「じゃあ確かめたいから下着も脱いでよ」

「……」

「ほら、早く」

観念したように力なく下着も脱いでいく映姫
あらわになった肢体に周りから下卑た歓声があがる

「きたきた♪本当に全部脱ぎやがったこのビッチ閻魔♪」

もじり

くう……

もじり

「ちっちゃー体同様貧相な体つきだなおい♪」

「でも、それがたまらねえな♪」

「お前もとんだ変態野郎だなオイ♪」

「お？おい見ろよ♪やっぱり濡れてるぜ」

好き勝手言う男達に何も反論出来ぬまま映姫はただ
目を強く瞑り歯を食いしばってこの恥辱に耐えていた

ビクンッ

ビクンッ

とろ

「やっぱり根は淫乱なんだねえ映姫ちゃんは♪
恥ずかしい姿見られて感じるなんて
そんなエロ閻魔にはお仕置きしなくちゃ♪」

「よっしゃ！皆で変態閻魔にチンポみるくぶっかけでお仕置きしようぜ！」

「それってお仕置きにならなくねえ？」

あゝ…

あゝ…

俺達は一斉に一物を扱きだす
そして映姫に悟られぬよう静かに催眠を施す

「変態閻魔な四季映姫・ヤマザナドゥは
精液が体に触れるだけでイツちゃうド淫乱…
そうだよな？」

「あ…あつ…」

大分精神的に追い詰められていたからか
あっさり暗示にかかる映姫

「皆で同時にぶっかけようぜ！！せーの…」



「「おおおおおっ!! いくうううう!!」

「んほおおおっ♪ おおっ♪ きたきたきたきたあ♪
ザー汁シャワーきたあああっ♪」

全員同時に射精し、映姫に向かって白い欲望をぶちまける
粘度の高い白い白濁で映姫の白い肌を更に白く染め上げる
さつきかけた暗示で映姫も精液を浴びせられて
絶頂しているようだ浅ましく舌を突き出し
ガクガクと体を痙攣させ陰部からは絶頂の証を
ぶしゃぶしゃ噴出させている

「あああああ♪ ザーメンアクメっ♪
ザー汁浴びるのきもちいのほおおおっ♪ おあっ♪
とまらにやいっ♪ きもちよしゆぎてアクメ汁ふきだしゆの
とまらにやいのおおおおっ♪」



「あへえ……♪孕み汁いっぱあい……♪
こんなに出されたら膣内射精じゃなくても
孕んじやいそお……♪」

「すげえ……ぶっかけただけでイキやがった……
どんだけ淫乱なんだよこの閻魔♪」

「俺の自慢の肉便器さ♪俺の合図一つで喜んでチンポ啜える
雌肉便器になっちまうのさ♪」

「ああ……♪いい……♪しゃいこお♪
全身ザーメンパックで私の体くっさい♪
ザー汁の匂いしか
しなくなっちゃったあ♪とれないい♪
これ絶対洗ってもとれないよおお♪」

「何言ってるんだよ映姫は精液排泄便器なんだから
ザー汁の匂いしてて当たり前じゃん」

「あ……ああ♪それもそうですね♪
ザーメンマーキングありがとう♪」
「ごいますう♪」



「すごい……今日はおチンポ一杯ありますね
奉仕し甲斐がありそうです♪」

「そうだよ、皆映姫に使い道の無いおちんぽ汁
コキ捨てにきたんだよ♪」

「ああ、そうだったんですね……♪
それでは好きなだけ私にザーメンどっぴゅん
してくださいね♪その為に私は
生まれてきたんですから♪」

「肉便器」と化した映姫は複数の怒張した
ペニスに囲まれても動じることなく、むしろ
便器である自分を使ってもらえる事に
喜びを感じているようだった

「まあそういうわけだから、皆自由に
使ってやってくれよ、あ、前の穴以外で頼む」

「？何だか分からんが仕方ねえ、その代わり
他の穴をガッツリ犯してやらあ！」



「早速ケツ穴もーらいつ♪」

「あつ！ずりい！」

「んあつ♪おちんぽお♪慣らしもなしに
いきなりの本気ピストンっ♪
ごしゅごしゅ腸壁ちんぽのエラで挟られて
きもちいのほおっ♪」

一番乗りで映姫に跨った男が
映姫の尻穴に怒張を突き立てすぐ
激しく腰を動かし始める
雌の都合などお構いなしの雄主導の
ケツハメ交尾だ

「しようがねーな！...じゃあ俺は上の口でも
使おうかな、ほら、閻魔様これ舐めてよ♪」

「ふぁい...ふぁい」



「うおおおきもちいいっ!!なんだコイツの尻穴っ!!
中の肉がマンコみてーに絡みついてきやがるぜ♪」

「ほっほらっ!しゃぶれっ!そ、そうだった!!
舌チンポ全体に絡ませろっ!おほっ♪

「いいぞっ♪のっ喉だっ喉マンコで奥まで咥えこめっ!」

「おーい、手え休ませんなよー
全身全霊をもってチンポに御奉仕すんだよ」

それぞれ自分勝手に映姫の体を使って
肉棒に刺激を得ていく、まるで肉人形を使った自慰だ
しかし乱暴に扱われて彼女自身も体全体に走る快樂に
身を震わせていた

「おおっ!で、出るう!!おらっ!ケツマンコで飲み込め!」

「おごっ!?おおっ♪んごえっ♪おえぶっ♪」

「おほお♪しゅごっ♪わたしの体チンポ快樂に
フル活用されてるう♪ひゃわあ♪

「ケツマンコ便器穴に精液きたあ♪
あっつい精液で浣腸きもちいいよ♪」



男達の射精は長い間続いた、ようやく落ち着きペニスを引き抜くとゴボボという音とともに口と肛門から男達の吐き出した精液が溢れ出した

「あ、折角恵んだザー汁なんだからちゃんと飲み込めよ勿体ねえな」

「これだけ出しちまったらケツの穴でも孕んじまうかもな」

はへへへ

「えへへ、しあわせえ♪
おチンポいっぱいしあわせすぎるう♪
おなかのなかにもザーじるいっぱい
わたしのからだ、ザーメンぶくるになっちゃったあ♪」

「これから毎日尻穴と胃袋に種付けしてやるからな♪
俺達がムラつときたらいつでもどこでもチンポハマハマするんだぞ？」

「はあい♪まかせてくださいあい♪」

「これで映姫は完全に男達の欲望を満たす便器になった
……そういえばこいつには部下がいたよな……」



「あんたが四季様の言っていた男かい？
あんたに会えって言われたからここで待ってたけど
見たところ普通の男だし、何であたいがここに呼ばれたか
まるで分らないねえ……
……あんた何者だい？」

目の前にいる大柄の女は映姫の部下の小野塚小町だ
彼女の言ったとおり、映姫に彼女をここに来させるよう
命令した、目的は勿論この女も肉便器にする為だ



「俺はただの人里の住人さ、映……閻魔様とは知り合いでね」
「知り合い……ねえ？そんな知り合い聞いたこともないけど
あたいに一体何の用なのさ？」

あからさまに猜疑の視線を送る小町
警戒されてる分映姫よりも催眠の効きが悪いかもしれぬ
なんとか意識を散らさなければ……

「いやなに、閻魔様に小野塚さんの監視を頼まれちゃってさ
サボリ癖のある部下を監視してサボらないように
教育してくれって」

「う……四季様、知らないうちにそんな事を……」

「お？仕事の話をしたら動揺しだしたぞ……
小町の人の成り方は予め映姫から聞いておいたのだ
このまま勤務態度を突いて揺さぶりをかけよう」

「俺が逐一小野塚さんの勤務態度を閻魔様に報告して
問題があるようなら閻魔様直々にあなたに対して
更生を促すようですよ物理的に」

「ぶ、物理的にって……」

「大分意識が俺からそれてきた今ならいけるか……？
気取られぬようさり気なく催眠をかける」

「大丈夫ですよ、だってあなたはオチンポを四六時中啜えて
ないと生きていけないド淫乱のおチンポ奴隷
なんですから、そうだね？小野塚小町」

「あ……う……？」



「おっ!?なんだこれ、メツチャクチャ柔らかー♪」

まず手始めにその大きな乳を揉む、それは想像してたより柔らかく手のひらが簡単に沈み込んでいくので思わず驚きの声漏れてしまった。指をめちやくちやに動かすとおっぱいもぐにぐにとその形を変えた

「んっ……♪ど、どうだい?あたいのおっぱいは……?」

「すっげーよこれ♪ずっと揉んでいたいくらいだ♪」

「気に入ってくれたようでよかったよ♪」



「こんだけデカイとあれじゃない? お乳とか出ちやうんじやないの……うん、そうだ。小野塚小町、お前は妊娠もしてないのに乳を噴出すエロ乳牛肉便器だ、そうだよな?」

「……え?……あっそ、そうかも……」

思いつきで暗示を追加し、柔らかい乳肉を揉み込む

「あんっんっ♪そんな揉んだらおっぱい出ちやうっ……♪」

ようやく絶頂も収まったのか噴乳の勢いも大分弱まった
それでもまだ乳首からはゆるゆると乳が垂れて体を
白く彩っていた

「んはあああ♪気持ちよかったあ♪
噴乳アクメさいっこお……♪」

「まだおっぱい出てるじゃん、本当に牛みたいだね小町は
肉穴だけじゃなくてミルクサーバーとしても
楽しめるなんて優秀な肉便器の素質ありだよ♪
あ、そっだ肉便器って分かるようにデコレーションして
やるよ♪」

映姫と同じく小町の体にも卑猥な落書きを施してやる

「お、これはいいねえ♪ありがと♪」



「今は飲み物代わりにしかならないおっぱいも
すぐ本来の役目に見えるようにしてあげるからね♪
小町みたいな淫乱肉便器なら卵子も淫乱だろうから
すぐ孕むよ」

少し不安だったがなんとか目論見は成功した
つるぺたな映姫にむっちり肉厚な小町
二つの肉便器を手に入れたわけだ
さて、「こいつはどんな風に調教してやるうか……」

「さあ、あたいの体で気持ちよくなっておくれよ♪
どこでもいいよ、いきなりオマンコから
いっちゃうかい？」

「んー、いや、まずはそのエロ乳で
おチンポ御奉仕してもらおうかな俺のチンポを挟んでよ」
「ん、わかったよ♪」



雌穴はメインディッシュだ
まずは前菜のおっぱいを堪能しよう
命令したとおり早速その豊満な乳房で俺の一物を
挟み、そしてそのままやわやわと乳肉の上から
手のひらで優しくマッサージを始める

「んっ♪」「れでいいかい？」

「ああ、いいよ♪もう少し激しく擦ってくれないかな」

「ん……その前に♪」

小町はおもむるに挟んだペニスの先をちろちろと舌で舐り始めた

「んっ♪ちゅっ♪しっ♪滑りをよくしておかないと♪
そうすればもっとおちんちん気持ちよくなれるからね♪」



唾液に塗れた小町の真っ赤な舌がねっとりと俺のチンポに絡みつく、隅々まで舌が這い竿全体が透明な唾液ででらてらと光っている

「んふっろっうっらい？あたひのおくひ、きもひいかい？」

「うっ……いいよ小町♪」「のまま咄ちやいそうだ♪」

「あんっ♪まだ出しちゃ駄目だよ♪」

「今はあたいのおっぱいを楽しんでもらっただから♪」

「ほーら、ズリズリ♪高速パイズリだよっ♪」

「おほっ♪すげー♪ぬるぬるがおっぱいで擦れてっ♪
小町はおっぱいでおチンポ磨くの上手いねえ♪
デカパイは伊達じゃないな♪」

「うふっ♪なんたってあたいは乳牛肉便器だからね♪
あたいのおっぱいは乳を搾るだけじゃなくて
ザー汁絞りにも使えるのさ♪」



たわわに突った乳房が激しさを増した小町の動きに
合わせて激しく暴れまわる
それに加えて潤滑油となった唾液がにちゃにちゃと
粘着質な音をたて聴覚からも俺の快感を引き出している
まったく可愛い雌便器だ

「そろそろ出るぞ……」
そのまま俺のチンポを抜きあげる！

「ん……あたいの胸に思いっきりどっぴゅんしてね♪」

「ああ……こんな一杯おちんぼみるく……♪
すっごい濃厚……♪あたいの口の中でへばりついて
飲み込んででも喉に絡みつこう……♪
こんなぶっかけられたら頭の中までザー臭一色に
染まってる……あたいのスケベスイッチ入っちゃう……！」

体中精液塗れにされ、その匂いで発情しきっている小町
暫く何かを我慢しているかのように体を震わせていたが
やがてビクビクと痙攣し再び乳首から母乳を噴出し始めた

「ひゃううううんっ♪でちゃったあ♪
ザー臭嗅いでおっぱい反応して母乳噴き出ちゃったあ♪」

気持ち良さそうに母乳を噴出し続ける小町
パイズリによる胸の感触と精液の匂いでそのまま
絶頂してしまったようだ、かなりの感度である



「まったく……勝手におっぱいでアクメっちゃうなんて
本当に小町はド淫乱肉便器だねえ……」
勝手に便器が気持ちよくなっちゃ駄目だろう?」

「ひゃい……♪」めんなひゃい……♪
おチンポ様そっちのけでおっぱいでイッちゃって
ごめんなひゃい……♪」

迎りは俺の精液と小町の母乳の匂いが交じり合って
嗅いだだけで頭がクラクラするような臭気を放っていた



「いや、許さないね♪」これから小町にしっかりと
肉便器の仕事がどういふものか教育してやるからな♪」

「はあい……♪」

「顔がニヤけてるぞ?まったく……しようがない便器だな」

「んちゅっ……うむっれうっ……♪」

「うむむ……♪あたいのおっぱい、美味しいかい？」

「ぶあつ……!ああ、小町のおっぱい、すく柔らかくて
まるでマジュマロみたいだ……!」



今俺は小町に膝枕されながらその豊富な乳を
赤ん坊のように吸っている、しかし、赤ん坊と違うのは
乳首に吸い付きながらペニスをフル勃起させていること
そして、小町も細い指を肉棒に這わせやわやわと
マッサージさせている点だった
所謂授乳手コキというやつだった

「まるで大きな赤ん坊だねえ♪まあ、赤ん坊はこんな
エグいちんぽなんか持ってないけどね♪」

緩やかな手コキの刺激で怒張の先から先走りが溢れてくる小町はそのぬめりを指に絡め竿全体に塗り広げ指とペニスの間の摩擦感を緩和させるそれに合わせて手の動きも次第にリズムカルに激しくなっていた

「えっちなお汁がおチンポからどんどん溢れてくるねえ♪
ほーらおちんちんいい子いい子♪シコシコ♪シコシコ♪」
小町の激しい指の動きに負けじと俺も乳首を吸う力を強め、乳首を甘噛みしたり吸ってない方の乳房を揉み上げ、彼女の快樂を引き出していく

「あっあっ♪おっぱいっはげしっ♪あっやあっ♪
ちくびっ♪らんぼうしちやらめえっ♪」

乳首への刺激で小町の体が快感に震える、俺の方もそろそろ限界が近づいていた

「うぐっ……！そ、そろそろ出そうだ……！」



いつもより長い射精が終わり快感の余韻に二人とも暫くの間呆然としていた

「んー♪小町の母乳、甘くて美味しいなあ♪チンポ汁出しちゃった分だけ飲んで補給しなくちゃ」

「あんっ♪そんなにしたらまた噴き出ちやううう…♪」



「これは所謂予行練習だからね、これからたっぷり小町に種付けするんだから実際に赤ちゃんが出来た時の為のね、この分なら孕ませても全然問題なさそうだね♪」

「それはよかったよ♪ああ、早くあんたの子種を子宮一杯に飲み干して肉便器としての役目を果たしたいねえ♪」

「ね、ねえ……そろそろおまんこにおチンポ頂戴よお♪
も、もう子宮がきゅんきゅん疼いちやって……♪
あたい我慢できないよお♪」

「慌てない慌てない、ギリギリまでおチンポ挿入我慢したら
種付け交尾した時すっごい気持ちよくなれるから」

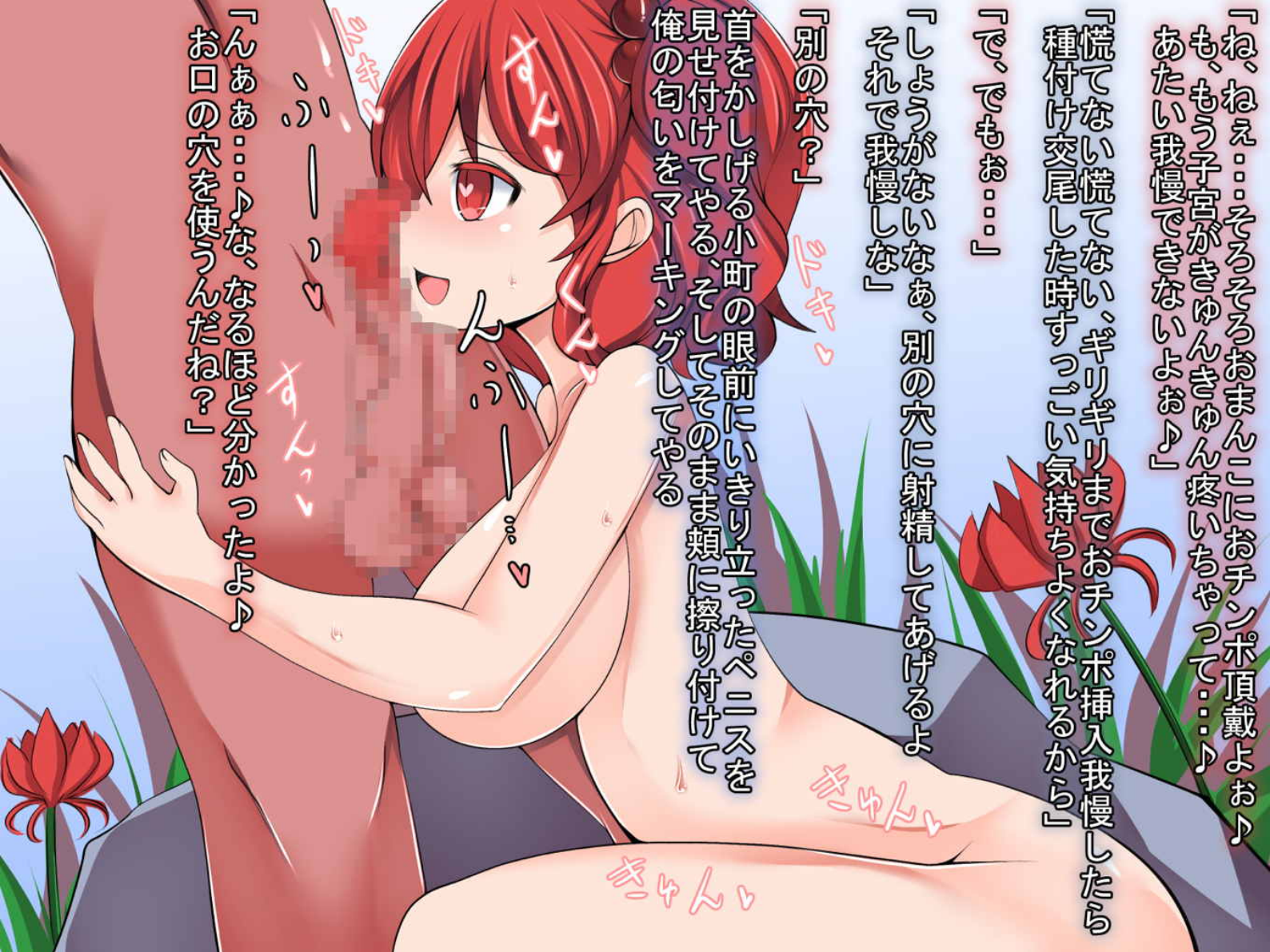
「で、でもお……」

「しようがないなあ、別の穴に射精してあげるよ
それで我慢しな」

「別の穴？」 ドキ♡

首をかしげる小町の眼前にいきり立ったペニスを
見せ付けてやる、そしてそのまま頬に擦り付けて
俺の匂いをマーキングしてやる

「んああ……♪な、なるほど分かったよ♪
お口の穴を使うんだね？」



「んー……♪次は丸ごと、いただきますっ♪」

「うおっおっ♪」

香だけで竿を愛撫していた小町だったが、それだけでは我慢できなくなったらしく大きく口を開けて勃起したペニスにかぶりついた
口の中で飴玉を転がすかのように亀頭を嘗め回す
口の中は粘ついた唾液でたっぷりでまるで女性器そのもの
のようであった

（んっっ♪チンポおいしいっ♪でも、大きすぎて全部収まらないよう♪あーん！おチンポ全部味わいたいのに♪なんてデカマラなんだい♪）

ゆっくりと頭を動かし口の粘膜をチンポに擦り付ける小町
口から竿が出てくる度、新しい唾液が塗布されて
常にてらてらと怪しい輝きを放っている

「くっ……！すっげー上手だ……！
やっぱ死神なんかより精液排泄穴の方がお似合いだぜ♪」

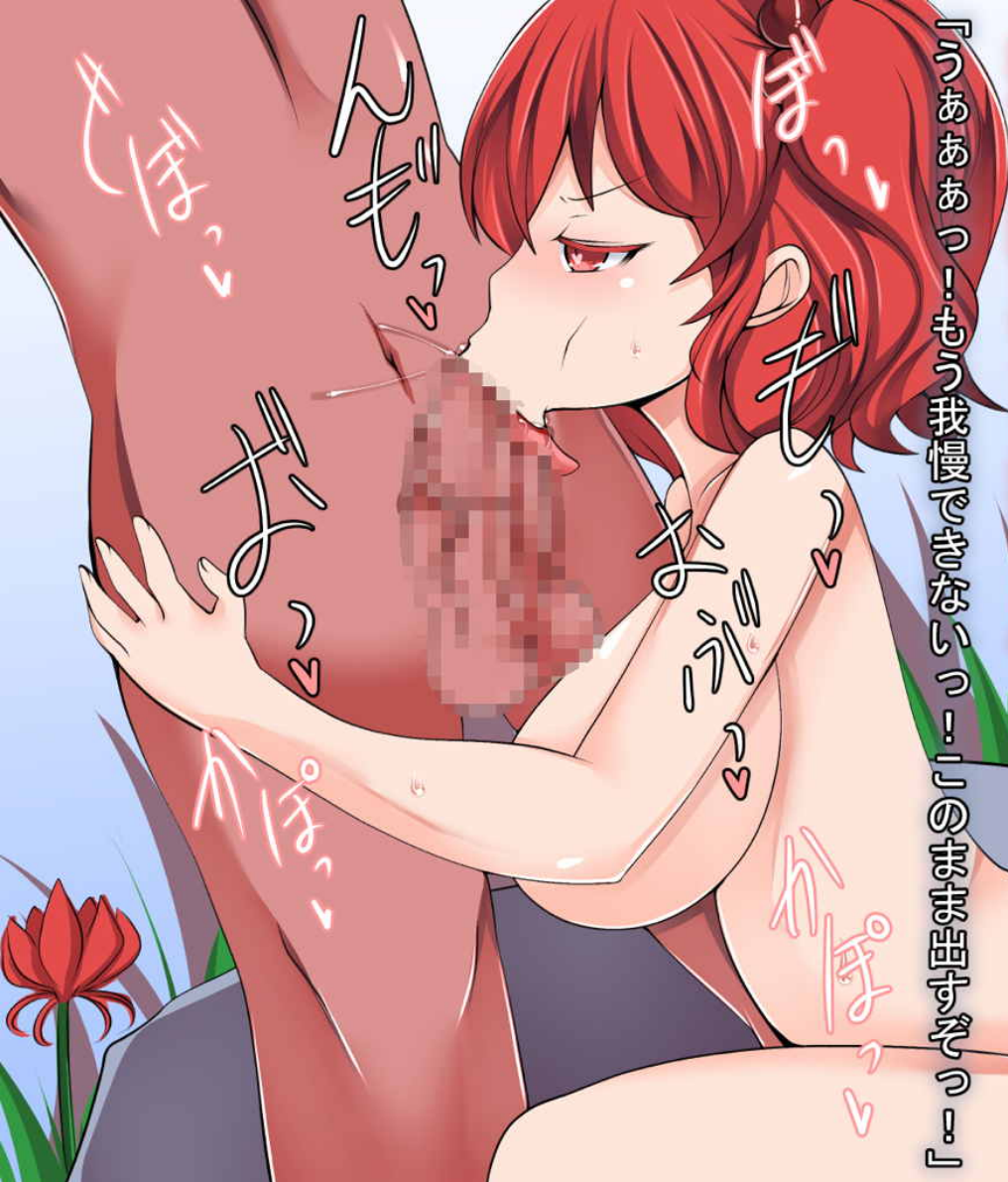


チンポを舐めしやぶる動きは次第に激しさを増していき
口を窄め肉棒を吸引する運動に変わっていった
口内の粘膜が膣壁のように竿にへばりつき
粘着質の液体を掻き混ぜるような音が当たりに鳴り響く

「うあああつ!? そつ! それっ! それヤバイっ!...!
ちんぽの中身がっ!...! 吸われるっ!...!」

(んっ!?! 段々チンポが大きくなってきた...?
あつ!...! 出るんだ! ビュビュユツって精子出ちゃうんだ
あたいの口をおまんこと勘違いして
種付け射精しちゃうんだ!...!)

「うあああつ!...もう我慢できないっ!...! のまま出すぞっ!」



「おらっ！俺様の特製蛋白汁っ喉マンコでしっかり
飲み干せやっ!!」

「んぶうううううっ!？」

背筋を這い上がってくる射精感と共に精液が小町の
喉奥に吐き散らかされる
長い口淫でキンタマに凝縮された特濃の精液が
次々と小町の胃袋に流れ込んでいく、これが子宮だったら
間違いなく妊娠していたことだろう

(すごっっっっっっっっ熱いっっっっっっっっんひっっ)

あっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ
喉から下に落ちていかないよおっっっっっっっっ喉がザー汁の熱さで
ヤケドしちゃうううううっっっっっっっっっっっっ



「どう？美味しい？俺のザーメン
栄養満点だからね、しっかり飲んでまた一杯母乳出して
もらわないと、小町は肉便器なだけじゃなくておっぱい
ミルクサーバーでもあるんだからね♪」

「はいいい……おいひかったれしゅうう……♪
おいひいおちんぽみるくえいようにして
がんぱつておいひいぽにうたくしやん
つくりましゅう……♪」

恍惚とした表情で精液を飲み干し口から零れてしまった
分も指で掬い上げて舐めとる
雄の吐き出す精液を一滴たりとも無駄にしないという
姿勢は立派な奉仕肉の証だ
射精が終わった今も甲斐甲斐しく俺のペニスを舐めている
目の前の愛おしい肉便器に、そろそろ本当の雌としての
喜びを教えてやろう……♪



「あん……いよいよだね？」

「いよいよあたい、そのぶつといおチンポでズコズコパコられて女の一番大事な部分に赤ちゃんの素どびゅどびゅブツこかれちゃうんだね……♪」

「そうだよ、たっぷりそのおチンポ専用摩擦肉にチンポ擦りつけて種付けしてあげるからな♪」

「やっとな肉便器としての本来の使い方をしてくれるんだね♪嬉しいよ」

「準備運動はもういいだろう、俺は小町の快感にヒクつき雌汁でぬるつく膣口にペニスをあてがう
口マンコもおっぱいも極上の雌便器だ
おマンコの方もさぞかし気持ちいいのだから……」



はっ……♡
はっ……♡

はっ……♡

ドキ

ちゅ

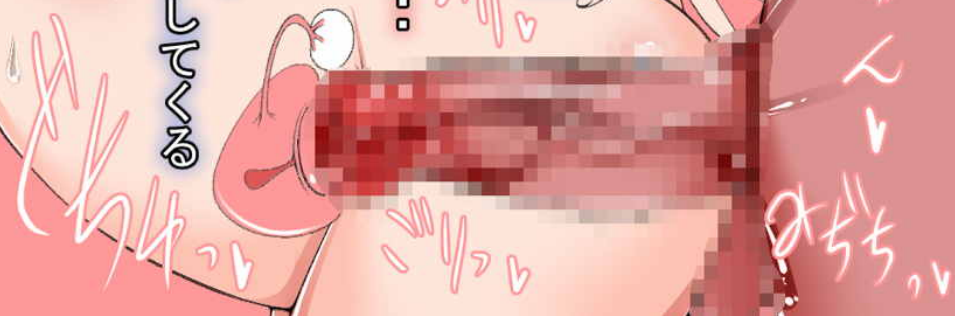
にゅ

徐々には慣らさず一気に肉穴の奥まで突き入れる勢いが強すぎて子宮口に亀頭がめり込み閉じられているべき子宮作りの為の大切な入り口が開かれてしまっている

「おっおおっ……♪いっ……一気に奥までえ……あたいの本丸……あたいの大事な部分……城門抉じ開けられちゃってるう……♪」

一気に突き込まれた衝撃で肉棒に絡みつく腔壁がビクビク痙攣して全体をマツサージしてくる入れただけでこんなな気持ちいいのだこれでチンポを腔壁に擦りつけたらどれだけ気持ちいいのだろう……

「それじゃあ動くから、あ、俺の事は気にしないで好きなき好きなきだけイッてくれていいよ俺も勝手に小町のチンポ擦り穴使って気持ちよくなるから♪」



思い切り奥まで打ちつけ子宮口に亀頭がめり込んだ
タイミングで射精する。びゅびゅと音が鳴りそうな
ほどの勢いで膣道を跳び越し、子宮に直接流れ込む
同じタイミングで小町もイッたよう
膣全体が俺の肉棒から少しでも精液を多く
搾り出して受精の確率を高めようとしていた

「あひっ……ひっ……んひいっす
すすい……あっつあつのザーメン♪
あたいの赤ちゃんのお部屋にどぴゅどぴゅ
出されてるう……♪」

「くおおおっ……キンタマの中身……！
全部小町のチン擦り専用便器穴に出るう……！」

「だして……全部出しちゃって……♪
あたいのオマンコっ♪あんだ専用の
ザーメン廃棄穴なんだからあ♪
気の済むまで種付け汁、コキ捨てちゃってえ♪」



「ふうー出た出た一杯出た♪
すっごい欲張りマンコだな
俺の子種汁全部飲み干しちまいやがった♪」

「んふうー…♪当然じゃないかあ♪
だってあたいは精液を男から絞り上げるのがお仕事
なんだからあ…♪」

たっぷり小町の子宮に直射精をぶちかまし
雌穴から肉棒を引き摺り出す
小町の愛液と俺の精液で斑模様にごーティングされている

「あっ…♪今受精したかも…♪つぶつぶって
あたいの卵子に精子が押し入ってきたあ♪
男の子の赤ちゃんだったら、一緒にあたいを犯して
女の子だったらあたいと一緒に犯して親子ともども
孕ませておくれよ♪」



小町に種付けして数日後、俺は小町を人里の倉庫に呼び出した、以前映姫を公衆肉便器にした時の連中も一緒だ

「……こんな所に呼び出して、こんな格好にさせて一体何が始まるっていうんだい？」

「白々しいな、肉便器を設置したらやる事は一つだろ？」

「お、これが新しい肉便器か、映姫ちゃんと違ってだらしねえ体つきだなオイ♪」

「こんな体してたらいつチンポハマられても文句言えねえだろ♪」

男達の下卑た野次と視線にあてられて体をもじもじと振る小町、しかし催眠術の効果か股間の淫裂からは雌汁がもうすでに流れ始めていた



「なあ、コイツもマンコ使用禁止か？」

「いや、コイツは大丈夫だどの穴でも問題なく使えるぜ
俺も試しに使ってみたが滅茶苦茶気持ちよかったぞ♪」

言いながら俺は小町の陰唇に手をそえ
そのまま左右に開く、くちやあ、という粘着質な音と共に
充血した腔肉が露になる、てらてらと愛液でぬめり輝き
軟体生物のように蠢きこれから進入してくるであろう
男性器を今か今かと待ちわびているようだった



「うわ、めっちゃエロイ……♪こんなメスとハメれるなんて
俺達は幸せ者だな♪」

「こんな素敵な肉穴に出会えた記念に祝杯をあげようぜ♪」
「よっしゃ」

俺達はすでにガチガチになった肉棒を取り出し
小町に向けながら抜き始めた、小町はこれから何が
起きるのか察したよう期待の眼差しを送る

「うおっおっ！出るぞっ！」

「おらっ！チン擦り穴に直接ぶっかけてやるぜっ！ぶっかけて孕めやっ！」

「ひゃうううんっ♪熱いよおおお♪」



俺達は一斉に小町の体に白い祝杯をあげる
ある者は開かれた肉穴に、ある者は無駄に大きな乳房に
思い思いの場所を自分の遺伝子情報で汚していく

「これでお前は俺達のザー汁便器だな♪
しっぴかり俺達の匂いを体に刻み付けておけよ？」

「はあい……♪」

「それじゃ、いただきまーす♪」

「んぐうううううっ!？」

早速小町の穴という穴に己の欲棒を突き立て腰を振り始めた、手足を拘束され好き勝手に陵辱されるその様子はまるでチンポを扱くためだけの道具のようだった
これぞまさに肉便器のあるべき姿であろう

「くっ口の中っ!滅茶苦茶に腰振ってもねっとりとした舌が追いかけてくるっ!」

「くおっ…ケツ穴っ締まるう…!!
チンポ食い干切られそうだ」

「はあっ…はあっ…!!相変わらず具合のいい肉穴だぜ♪
今日もたっぷり中出しして卵子まで犯してやるからな♪」



限界を超えたペースで小町の交尾穴を犯していたので
すぐに絶頂が見えてきた

「おおっ……！出るうっ……！また小町の子宮に
アツアツこってりザーメン出るぞっ……！！
ちゃんと受け止めるよ……っ！」

「俺もっ出るっ！一杯出すからたっぷり飲んで
赤ん坊産むための栄養にしてくれよなっ！」

「糞穴にもたっぷりひり出してやるからなっ！
直腸から直に吸収しやがれっ……！」

それぞれ犯していた穴で射精し、白い汚濁を小町の体内に
吐き捨てる、小町は快感で緩みそうな穴を必死で締めて
精液が漏れないように頑張っている



もい♡

きゃん♡

もい♡

きゃん♡

ふー♡

いっ♡

「一回だけじゃ物足りないだろう？ほらあ、もっとあたいの体を使って精液どっぴゅんしておくれよお♪」

拘束を解くと自ら木箱の上につつ伏せによりかかり尻を突き出し俺達を誘惑する

「自分からおねだりするなんてとんだエロ便器だな♪」

「まあ、使ってくれってお願いされちゃあなあ……♪でも、人にお願いするときはお願いする態度つてもんがあるからなあ？」

「うう……お、お願いしますう♪卑しい性処理便器に精液恵んでください……♪ザーメン排泄処理穴におチンポズコっていっぱいザー汁コキ捨てて下さい……♪」

「よしよし、よく出来ました♪」



ちゅっ

びびん

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

はへ

はへ

はへ

はへ

はへ

はへ

はへ

「おら、「これが欲しかったんだらう？」

「ああん出たあ♪チンポお……♪目の前にデカチンポお♪
きやんっ!?後ろにも……後ろにも勃起チンポ当たってるう
あたいのおまんことキスしてるう……♪」

眼前と肉穴に肉棒を突きつけられ興奮する小町
蕩けた表情で肉棒を見つめ鼻息を慣らしその雄臭を嗅ぐ
口は早くその肉棒をしゃぶりたいたいと言わんばかりに大きく
開かれお預けをされた犬のように短い呼吸を放っている

「おいおい、それじゃ肉便器というか雌犬だな♪」

「雌犬でも肉便器でも生肉オナホでもなんでもいいからあ♪
早くっ早くっ早くおチンポでおまんこジュコっってえ……♪」

膣へのピストンが段々激しさを増していき、フェラチオも
いつしか男の方から腰を振るイラマチオに変わっていった
口すらも生殖器扱いされてそれでもなお、小町は
ペニスに快楽を与えるべく膣肉を締め、口内をうねらせる
雄汁を自分の体内に貰うべく必死だ

「ん」おっ…おっ…!?おもっ…おほあっ…♪
「じゃあもっつと性根入れてしゃぶれやっ！」

「んぐっ…ひやああ…!ザーメンっ!ザーメンくれなきや
やらあっ…!」
「ペース上げていくぞっ!しっかりチンポに御奉仕しろよっ
でないとザー汁くれてやんねえぞっ!」





「よし、上手いぞ...そろそろご褒美タイムだっ...!!
 たっぷりくれてやるからよーく味わいやがれっ...!!」

「んぐううううううううう」

小町の胃袋と子宮に男達の白い汚濁が流れ込む
 小町はそれを零さないように両方の穴で必死に飲み干す

（はああ...! 特濃ぶりっぶりのザーメンきたああ!
 すごい熱うい...熱すぎて
 あたいの胃袋と子宮、ヤケドしちゃうよおおお...!）

ぼぼ
 びび
 めろ
 ぎゅ
 らん
 ん
 ぐ
 ぐ
 ぐ
 ゑ
 げ
 げ
 げ

「んふああああ……♪いっぱい出たねえ……♪
あたいのチン擦り穴、気持ちよかったんだね♪」

「ああ、お前は最高の肉便器だぜ♪」

「うふふ♪それは最高の褒め言葉だねえ♪

……♪「んなに出してもらったんだからそろそろ本当に
孕んじやうかもしれないねえ……♪」

「孕んだら絶対産めよ？生まれたガキも立派な肉便器に
してやるからな♪あ、俺達は面倒見ないけど
もう誰の種だかわからねーし」

「それもそうだねえ、あたいが責任を持って育てるよ♪」





「今日も今日とて皆で小町の肉穴を穿る
いつも通り全員同時に小町の穴という穴を
犯してやるのだが、少し趣向を凝らそうと思う」

「早くう...♪早くおチンポハメハメしてえ...♪」

「あのなあ、肉便器は雄のチンポを気持ちよくさせる為に
存在してるんだからな？お前が気持ちよくなるのは
二の次なんだぞ？」

「相変わらず『肉便器』な小町は淫乱だ、チンポを咥え込む
ことしか考えてない、だが肉便器でない彼女はどうかだろう」



「おらあつ！お待ちかねのおチンポ様だ！
よおーく味わえ！」

「あひいつ♪チンポオっ♪一気に奥までへえ……♪
おチンポ奥まできたああ……♪」

「息に子宮口まで到達した肉棒に小町は軽く絶頂していた
ようだった」

「おいこらっ！肉便器が先にイッてどうすんだよ！
チンポをちゃんと気持ちよくしろやっ！」

「らららってえ……♪チンポ、きもちよすぎい♪」

「あううううう♪チンポ♪おチンポピストンツ♪
じゅこじゅこってあたいの赤ちゃんのお部屋ノック
してるうっ♪」

はえ……？

「くおっ……相変わらずキツキツマンコだぜっ！
これだけ使い込んででも緩くならねーとか
最高の肉便器だっ♪」

俺は嘘偽りの無い賞賛を送る
こんな最高の雌肉、そうそう出会えるもの
じゃない
だが、俺はあえてココで小町を肉便器から
死神に戻してやる事にする

「戻れ、【小野塚小町】」

「はえ……？……え？」「どこ？」？あたいは何、やって……え？」

催眠術を解かれた小町は今自分が置かれている状況を
まだ理解しきれていないようだった



「お、お前達、一体っ……!! ひぎっ?!
こ、こんなこととしてただで済むと思ってるよ……!」

「何言ってるのさ♪ 今まで散々俺らのチンポ啜えて
喜んでた癖に」

「うっ……うっ……うっ……そんな事あるわけ……っ!!」

「分かった分かったととりあえずこれでもしやぶってるや」

「むぐううううううっ!!」

「おいおい、噛み切られたりしねえだろうな?」

「大丈夫だ、俺達には危害を加えられないよう
暗示は残してある今までどおりで大丈夫だ」

「マジかよ♪ 便利だな催眠術♪」

「この嫌がってるところを肉便器にしてやるのも
中々そそるな♪」



「おらあ！いつもの特製栄養ドリンクだ！
たっぷり栄養つけやがれええっ！」

「下の口にもたっぷりくれてやるぞっ！！おおっっっ！！」

「んぐううううう！！？」



嫌がる小町の体内にありったけの白濁液を
注ぎ込んでやる、それを拒絶しようと小町は必死に
口の肉棒には舌で、膣内の肉棒には膣圧で外に押し出そうと
力を込めるが逆効果だった
強烈な快感にますます射精の勢いは増し、更に多くの汚濁が
小町の体内を汚していく

（いやあああつ！！き、気持ち悪いっ……！こんなもの
飲みたくないいいいいいい！！）

「えへ、えへへえ……♪
チンポ……おチンポいっぱあい……♪」

あれから数時間後、俺達はぶっ通しで小町の体を買った
最初は激しく抵抗していた小町だったが穴という穴を
肉棒で穿り尽くしてやると次第に抵抗も弱くなり
最終的には催眠術無しでも快感にその豊満な肉体を
揺らし始めるようになった

「どうだ？おチンポ様気持ちいいだろ？」

「これからは絶対服従するんだぞ？」

「はい……♪服従しましゅ……♪」

「あたいおチンポ様に完全服従しましゅううう……♪」

これで映姫に続いて小町も完全に屈服させる事が出来た
しかも小町は孕ませる事が出来るからこれから肉便器は
どんどん増えていくことだろう……
生まれてくるガキの性別を何とか全員雌にする事は
出来ないだろうか、今度竹林の薬師に尋ねてみよう……



「う……」「これいいですか……？」

映姫と小町、二匹の肉便器が己の秘部を天に突き出し
仰向けに寝そべっている、所謂マンぐり返しというやつだ
二人とも心底恥ずかしそうに、必死にその体勢を
維持している、彼女達は今催眠術にかかっている
いつもの淫乱な彼女達もいいが、正気でこのようない
恥辱に震える様子も中々オツなものだ

「いやー絶景かな絶景かな♪二人のマンコからケツ穴から
丸見えだぜ♪」

「二人ともエロイ体しやがって、マジで肉便器が
板についてきたな♪」

今回も俺以外の男達を複数呼んでいる、二匹同時に
相手するのも骨だし、なによりこいつらは公衆肉便器なのだ
皆で使ってやるのが正しい使用方法だろう





「さて、中身の方はどうなってるかな？」

小町の雌穴、映姫のケツマンコをそれぞれ広げてみる
今までかなりの回数肉棒を咥え込んだ穴は指で穿ると
簡単に広がり中の様子が丸見えになった
これだけ柔らかいのにいざ雄の生殖器を咥え込んだら
極上の締め付けと快感を返してくれるのだ

「中の髪まで丸見えだぜ！イヤらしい汁でヌルついてやがる
恥ずかしがつておいて感じてるんじゃないの？」



「そ、そんな」と、ない……ん」

「ね、ねえもういいいだろう？
この格好をやめさせておくれよ……」



「しようがないなあ、じゃあ恥ずかしくないようにしてやるよ、いつもはこの程度じゃ恥ずかしがりもしないのになあ？それどころか体に精液がついただけでイッチまうようなド淫乱肉便器なのにな？
そうだろ？四季映姫・ヤマザナドゥ、小野塚小町？」

「あ……！」

「っ……！」

「ここでいつもの肉便器に戻してやる、ついでにぶっかけられただけでイクようにしておいた」

「よおし！恥ずかしいなんて言ってられなくしてやるよ
ザー汁たつぷりぶっかけてやるからな！」



「ああん♪チンポいっぱい♪おチンポ祭りだあ♪
射精っ♪早く射精してえ♪ほら、ココに♪あたいの
おチンポケース穴にシコシコドツピュンしてえ♪
子宮口にホールインワンで遠隔受精させてえ♪」

「ほらあ♪あなた達もおまんこの代わりに私の排泄穴に
たっぷり子種汁ひり出しちやっつてくください♪
私の尻穴は排泄の為の穴じゃなくて
行き場の無い雄の精子を引き取る場所なんですからね♪」

先程までの恥らいっぷりが嘘のようだ
やっぱり催眠術様様だ



「とんでもねえエロ肉オナホだなお前ら♪いいいぜ
お望み通りたっぷりぶっかけてやるよ！いくぜお前ら！」

「よっしやあー！」

「『おおおおおっ……で、出るっ……』」



俺達は二人の体に向けて盛大に射精した
体全体にかけようとする者、顔を執拗に狙う者
二人の性処理用の穴目掛けて打ち込む者……
結果映姫と小町の体全体が男たちの欲望の残滓で
デコレーションされることとなった

「ひうっ……熱い……お尻の穴っ……
直腸までザー射届いてるう……」



「ひやうんっ♪子宮口に直接ザーメンびちゃびちゃって
かかっているよお……直接チンポハメハメしてないのに
孕んじゃううう」



「おほー♪すげーすげー♪ケツ穴とマンコがザーメン
ゴクゴク飲んでるのが丸見えだぜ♪
中の粘膜めっちゃ蠢いてるぜ
どんだけザー汁飲みみてえんだよコイツら♪」
「だ、だってえ……あたし達雄のザーメン飲み込むのが
仕事だもん……♪」

「そうですよ……♪折角私達のザー汁コキ捨て穴に
ザー汁吐き捨ててくれたんですから
しっかり飲み込まないと♪」

二人は恍惚とした表情でそのままの姿勢でじっくりと
放たれた精液を肉穴で飲み込んでいた
仰向けのままなのは肉穴から注いだ精液が
零れ出さなためだろう
精液を一滴たりとも無駄にしないという姿勢は流石としか
いようがない

「ね、ねえまだ……？まだ舐めちゃだめえ……？」

「まだ駄目だ」

「うっ……」

うず
うず

む
〜
↓

今俺は二人を俺の勃起チンポの前に跪かせている
だが、いつものようにいきなり始めるのではなく二人に
「待て」をさせている、焦らす事によって目の前の二匹の
肉便器はより激しい奉仕をしてくれるだろう
現に今だって早くチンポを口に入れたくってうずうず
しているようだった

「うう……焦らさないでください……目の前にチンポが
あってしゃぶれないなんて生殺しもいいところです……」

早くしゃぶりたいそうにしてはいるが俺の命令を聞き入れ
しっかり待機している、催眠術の効果はバッチリだ

「まだまだ、もう少し我慢しろ」



「……よし、そろそろいいぞ、しゃぶれ」

「もちろーん」

フェラの許可を出した途端、小町が俺のチンポに飛びつく。そのまま亀頭を口先で咥え、舌先でチロチロと舐め上げる。

んっ♡♡♡♡♡
はっ♡♡♡♡♡

んっ♡♡♡♡♡
はっ♡♡♡♡♡

「んっ♪んぢゅっぢゅるるっ♪やっぱりこの味だよねえ♪

濃厚な匂いに舌先が痺れそうな雄の味♪
いくらでもしゃぶっていられるよお♪」

へっ♡♡♡♡♡

あ

む

「あっ……！ずるいですっ小町！順番決めないでいきなり御奉仕フェラ開始するなんて！」

乗り遅れた映姫が不満そうにしているがその視線は肉棒にしっかりと釘付けにされていた

「わ、私にも舐めさせなさいっ!」

「きゃんっ!」

我慢が出来なくなつたのか映姫は小町から肉棒を奪い取り
そのまま小町同様肉棒をしゃぶり始めた

「あーっ!ひどいですよ四季様!
あたはまだ舐めていたかつたのに!」

「小町ばかりしゃぶってずるいですっ!んむっ♪
ここは上司である私に譲りなさいっ♪んちゅっ♪」

「むーっ!ここでは上下関係なんか関係ありませんよ!
あたかも四季様もこの人の肉便器なんだから
おチンポの優先権なんかありません!」

「まあまあ、肉便器同士で喧嘩するなよ
チンポは逃げもしないし、減りもしないから
仲良くしゃぶれ」



二人とも競い合うように俺の肉棒をしゃぶりあげる
どちらもそこそこのいや、かなりの美人だ
普段ならこんなことをするはずない二人が何の変哲もない
人里の男のペニスに浅ましくむしやぶりついている
この異様な光景に改めて俺は興奮を覚えていた



「うっ……上手いぞ二人とも！そのまま舐め続けろっ……
そろそろ出るぞっ……！」

「いいいですよっ♪好きな時に出してくださいっ♡」

「は、はやくっ♪ザーメンっ♪ザーメンちようらっ♡」

「ぐっ……！イクぞっ……！」

必死で肉棒を貪る二人に
精液のシャワーを浴びせかけてやる
ぼたぼたと頭から白濁を浴びているのに、二人は動じる「と
なくチンポをしゃぶることに夢中になっている

「ひゃんっ♪いっぱいでしたねえ♪
あたいの舌、そんなに良かったかい？」

「私の舌だって負けてないですよね？」

「ああ、どっちの御奉仕フェラも気持ちよかったよ♪
下の穴だけじゃなくて上の口も名器だなんて
つくづく優秀な肉便器だよお前達は」

「えへへ、良かったあ♪」

「お役に立てて光栄だよ♪」



「ん……♪相変わらずすい濃さだねえ……♪
ぷりっぷりでまるでゼリーみたいだよお♪」

「ぢゆるっ……こんなに出して……でも、大丈夫ですよ♪私達が
ちゃんと全部飲み込みますからね♪んっ♪」

自身の体に巻き散らかされた精液を指ですくい、
舌で舐めとっていく二人、まるでそれが極上の「馳走で
あるかのように美味しそうに平らげていく

「はあ……♪なんて濃厚なのかしら♪
胃に落ちていくたびに子宮にキュンキュンきちゃう♪」

「ん……♪でもまだ足りないよお……もっど、もっどもっど
ザーメン飲みたいよお♪アンタも出足りないだろう？
もっどあたいた達を使って精液排泄しておくれよお♪」

「便器に言われるまでもない、これからももっどもっど
ザー汁漬けにしてやるからな♪」

今日は野外でプレイだ
人里の寂れた路地裏に二人を呼び出し
いつもの格好にさせる、衣服を脱ぎ去った二人の恥部には
巨大な筒状の物体が咥え込まれていた
卑猥な道具屋で購入したバイブ、と呼ばれるものだ
バイブは時々二人の淫肉の動きに合わせてピクピクと動き
まるで生き物のようであった

「言いつけどおりちゃんと呼んできてきたよ♪
これも確かに太くてゴツゴツしてて気持ちいいけど
やっぱり生肉にチンポがいいよお♪」

「私も小町に同感です…♪仮初のチンポでは
本物のおチンポには敵いません…♪」

「お前らみたいなの淫乱雌便器には栓が必要だからな
俺がいない時はそのバイブでお前らのだらしない
便器穴を塞いでおけ」



「とりあえずその栓を抜いて肉穴を晒してみる」

「バイブが挿さって、抜くように命じる」

「二人にバイブがずるりと穴付近の淫肉を引き摺りながら出てくる、引き抜かれた瞬間二人のチンポ擦り穴からぶちゅつと淫汁が噴出した」

「ん……♪これでいいかい？」

「おおっ……♪めっちゃエロイな……穴開きっぱなしじゃねえか……♪」

「涎だらだら垂らしやがって、そんなにチンポ啜えたかったのかよ、この雌豚が」

「だってえ♪おチンポハメハメしてなきや肉便器じゃないですもの♪」

「人が来るかもしれないのにこんな格好で恥ずかしくないわけ？」

「？なんでですか？男のチンポを擦り上げるのに衣服は邪魔でしょう？」

「やはり人里の、それも屋外でも物怖じすることなくその肢体を曝け出す事に何の抵抗ももたない、もうチンポのことしか頭にないらしい」



「そうらお待ちかねのおチンポだ！」

「ひゃんっ♪メリメリってぶっといおチンポきたあ♪
やっぱり本物いいっ♪本物の生肉チンポさいこお♪」

「おっ♪おおっ……♪お尻の穴っ……♪
みちみちに押し広げられてるうっ♪」

呼んでおいた男達に二人の肉穴を犯させる
一息にチンポを根元まで突き込む遠慮のない挿入にも
使い込まれた便器穴は柔軟に肉棒を飲み込んで

「うはっ……！小町の雌穴……！グネグネ動いて
入れただけで出ちまいそうだった！」

「おおっ……！映姫の尻穴はギチギチで俺のチンポを
食い千切らんばかりに締め付けてきやがるっ！」

「その穴好きなように使ってくれて構わないから
たっぷりウチの肉便器どもを可愛がってやってくれよ」



極上の肉の穴に男達は自分達の限界がすぐに訪れることを察し、初っ端から最高速の力強いピストンで肉穴に自らの怒張を擦り付ける

「うあああつ！やべつチンポとまらねえっ！ぷりっぷりの肉の粒が俺のチンポに絡み付いてチンポ蕩けちまうっ！」

「閻魔ケツマンコやべえええっ！突き込む時はふわふわなのに引き抜くときはめっちゃ食いついてくるっ本当にこれ尻穴かよっ！」

「おおっ♪んおっ♪っほお♪おひりのあにやつ♪いいっ♪おチンポでケツマンコホジホジされてっ♪ぎもぢよくなっちゃうっ♪」

「はああん♪いいよお♪あたいのおチンポケース穴でいっぱい気持ちよくなっておくれよおっ♪いっぱいっでもっいつでも中出し種付けしてくれてかまわないからねっ♪」



男達は激しい勢いのまま二人の体内に射精した
体の内側に流れ込んでくる熱い奔流に二人もそのまま
絶頂を向かえ背中を反らしながらビクビクと痙攣している

「ひっ……っ！ザーメンきたあ♪知らない男の種付け汁
あたいの子宮に直接ドバドバ流れ込んできてるうっ♪
イクツ……♪子宮にザーメン飲まされてアクメスイツチ
入っちゃううう……♪」



「おおあっ♪ザー汁浣腸っ……！「びゅーびゅー」って……♪
孕んじゃうっ……♪「んなに腸内射精されちゃったら
私っ！お尻の穴で赤ちゃん孕んじゃうううっ♪」

たっぷり種付けされた余韻を味わっている二人
穴は快感に弛緩しきつていて
だらしなくその口を開け、男達に注がれた精液を「ぷいぷいと吐き出していた

「あーもう、だから零すなっていつてるだろうが
そんなんじや便器失格だぞオイ」

「あううう……♪」めんなさい……♪私達はダメ便器です
どうか私達に罰を与えてください♪」

「そのおチンポであたい達に罰を与えてください……♪
いや、もう罰でも何でもいいんでおチンポください！
おチンポ♪早く次のおチンポ頂戴よお♪」

「ただ単にお前らがおチンポハマハマして欲しいだけ
じゃねえか、まあいいさ、それでこそ性処理便器だ
これからもっと仲間呼んで代わる代わる中出ししてやるよ
そのうち里の男全員でお前らを犯してやる
そしたら晴れてこの里の公衆肉便器だ、良かったな♪」



「こ、今度は一体何をしようってんだい……？
し、しかも今回は何でこんな人目の多い場所に……？」

今、二人はいつもの格好で秘部を曝け出すよう
両腕を頭の後ろに回し、がに股で座り込んでいる
そして今回は人目の少ない路地裏ではなく
人里のど真ん中で行っているのだ

「今回はいよいよ人里の男衆全員にお前達をお披露目
しようと思う」

「こ、この機材はなんなんですか……？」

二人の体には透明なチューブが繋がれていてその先には
漏斗が設置してあった

こう

「ああ、これね、これは皆に効率よく精液をコキ捨てて
もらえるように作ったんだ

皆この漏斗に射精すれば、お前達の便器穴に直接流れ込む
って寸法さ、これなら複数人いっぺんに中出し
出来るだろう？」

「くっ……！こんなこと……良く思いつきますね」

「いやあ、照れるねえ」

肉便器
精液をかくん
下さい

もじい

もじい

むちっ

くっ……



二人の霞もない姿に道行く里人が視線を送る
その内幾人かが恐る恐る俺に話しかけてくる

「お、おい……?」これは一体……?

「ああ、これですか?」この二人は肉便器なんですよ
おたくは最近溜まってたりしませんか?
この二人をオカズにこの漏斗に射精してみませんか」

「え、そ、そんな……いいの?」

「いいんですよ、今日はこの肉便器の初お披露目でね
今日は挿入はなしで、まずは人里の男達の精液の味を
こいつらに教え込んでやってください」

「へ、へ……そ、そういうことなら」

「お、俺も……!」

一人が肉棒をさらけだすと、他の男たちもそれに続き
自分の一物を取り出し始めた

「さあ、この二匹の肉便器に好きなだけザー汁を
下の口から飲ませてやってください!」



一度行動に移すとためらいがなくなったのか
男達は一心不乱に小町と映姫の体をオカズに自分の一物を
扱き始める

「うひょー♪この赤毛の女たまらねえ体つきしやがって！
たまらねえぜ♪」

「お、おれっ昔からこの閻魔様のこと好きだったんだよっ♪」

間も無く射精し始めるものが出始める、体にぶっかけて
くれても構わなかったのだが、律儀に漏斗目掛けて
白い汚濁を発射してくれていた

「おっおっ……出るっ……！」

「うっう……お、俺の種汁でっ孕めっ！」

「いやああった、出さないでええ……！」

「そっ」に出しちゃだめえ……！赤ちゃんできちやうっうっ……！」

は内傳
由にフッか
精液め
ま



「おい、この女達に好きだけぶっかけていいってよー!」

「マジ?お、この漏斗に出せばいいのか…って
これじゃ孕んじやうだろ…え?いいの?」

次々と興味を持った男達が集まり
大きな人だかりになっていく、中心にいる映姫と小町は
すっかり男達の下卑た欲望の標的となっていた

「だ、だめえ…それ以上出さないで…」

「ひい…チューブまで流れ込んできてる…!?やだ…」

「さあ、皆さん…ジャンジャン射精してってください!
皆さんの精液をこの二人に恵んでやってください!

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」



二人の周囲に晒される肉棒の数は減るどころかその数を増していった

「はいはい、押さないでくださいーい
一人射精は三回まででお願いしまーす」

「いぎっ……!こ、これ以上は入らないよおお……!」

「お、お腹っ破裂しちゃいますっ……!も、もう許してえ……!」

女ぐぐっ

「何言ってるんだ二人とも、お前達は性処理用の肉便器
なんだからおチンポ要求には全部答えないとな
ここにいる男達のチンポが吐き出すもの全部その肉穴で
飲み干すまで解放はしないからな」

「そ、そんなあ……!」

「おら、上の口じゃなくて下の口動かせや
そんなんじゃないつまで経っても終わらねえぞ」

後ろで順番待ちをしている男達はまだまだ沢山いる
暫くはこの宴を楽しめそうだ



数時間後、里人の列がようやくひと段落ついた
二人の体は無数の男性の精液でドロドロになっ
二人の肉穴に接続されている漏斗にはなみなみと
自濁液が注がれていてチューブを伝って
肉穴に流れ込んでいる
粘度が高いため、その速度はゆっくりとしたものでった

「んへえ……♪子宮にザーメンいっぱいだよお♪
飲んででも飲んででもなくならないのお……♪」

「ひょうらう……♪お、おなかっお腹もうザー汁で
パンパンなお……♪おにやか、ザーメンタンクに
なっちやっただあ……♪」

二人の顔は快感で蕩けきりだらしな表情を浮かべている
さきほどまであんなに嫌がっていたのに今ではもう
すっかり注がれてくる精液に舌鼓を打っている
もう、催眠術は使っていない、この二人は自分の意思で
精液処理の肉便器に成り下がったのだ
これからは人里共用の便器として男達のチンポの面倒を
見てくれることだろう

